ごあいさつ

しまねミュージアム協議会では、平成16年度に文化庁の芸術拠点形成事業の支援を受けて、「しまねのミュージアム探検隊〜77の謎に挑戦!!」というガイドブックを作成しました。これは、加盟館がそれぞれ自慢の資料１点をクイズ方式で紹介し、それをきっかけにして各館に足を運んでもらおうとするものでした。同時にホームページにも情報を盛り込み、検索ができるようにしました。

そのような中で、美術品や考古資料のジャンルにも属さず、生活に密着し身近であるが故に、その大切さを忘れられてきた民具についてスポットをあてようという動きが出てきました。民具は、昔の人々の知恵の結晶でありながら生活様式の変化により失われ、地域の開発により用をなさなくなってしまったものがほとんどです。

今回の「民具100選」は、今まであまり日の目を見なかった民具資料について１００点を選んで作成したものです。所有する加盟館から地域や生業により重要であるとして推薦してもらった資料です。そしてこれをカードにして紙芝居方式で小中学校の授業に使用できるようにしました。「もの」があふれている現在に生きる子供たちに、昔の人間の知恵やそれぞれの地域の特色ある産業に触れてもらい、未来への礎としてもらえれば幸いです。

平成18年３月
しまねミュージアム協議会
会長　勝部　衛

凡例

1. 本資料は、文化庁が実施している平成17年度芸術拠点形成事業の支援を受けて作成したものです。

2. 本資料に掲載している資料は、平成17年度しまねミュージアム協議会に加盟している館が保管・展示している民俗資料から選択したものです。

3. この資料は、次のように分類し、通し番号を付けています。
   衣・食・住・山仕事・農耕・漁撈(海)・漁撈・漁撈(淡水)・たたら・和紙・養蚕・商い・石材業

4. 民具の名称は、県内でも地域により様々ですので、一般的と思われる名称を使用しています。

5. 各民具は、地域性や時期差などで種々ありますが、代表的なものを掲載しています。

6. 掲載の民俗資料及び関連の資料を保管・展示している加盟館は、下記の通りですが、所在地、連絡先などは、下記のURLで表示されるHPをご利用ください。
   資料館名一覧
   松江郷土館・島根県立博物館・松江市鹿島歴史民俗資料館・松江市立八雲町郷土文化会館・安部榮四郎記念館・出雲玉作資料館・
   宍道蒐古館・来待ストーン・浜田郷土資料館・歯の歴史資料館・出雲民芸館・平田本陣記念館・益田市立歴史民俗資料館・石見銀山資料館・
   和鋼博物館・安来市立歴史資料館・江津市郷土資料館・鉄の歴史博物館・可部屋集成館・絲原記念館・横田郷土資料館・
   飯南町歴史民俗資料館・邑南町郷土館・浜田市立金城歴史民俗資料館・津和野町民俗資料館・日原町歴史民俗資料館・隠岐郷土館・
   海士町歴史民俗資料館
   URL http://www.v-museum.pref.shimane.jp/

7. 本資料の作成検討委員は、下記の通りです（敬称略）。
   浅沼　博（山陰民俗学会）
   隅田正三（山陰民俗学会）
   三宅博士（山陰民具学会）
   村尾秀信（中村中学校校長）
   稲田　信（宍道蒐古館）
   浅沼政誌（島根県古代文化センター）
   本間恵美子（島根県立八雲立つ風土記の丘）
   平野芳英（荒神谷博物館）
   高谷茂男（島根県立八雲立つ風土記の丘）

8. 写真撮影　　アイ・フォート　板垣　宏

民具100選

なんだろう？ お茶の道具かな？これを使うと、虫歯予防の効果もあったんだよ。







衣

歯の歴史資料館・邑南町郷土館・絲原記念館・
飯南町民俗資料館など

お歯黒道具（お歯黒を塗る道具）

解説

日本では、古くは男女とも上流階級だけにお歯黒が用いられていましたが、中世あたりからは、女性専用になったといわれています。江戸時代になって、結婚した女性のシンボルとなりました。結婚した婦人は、眉を剃り落とし、お歯黒をつけて人妻のしるしとしました。江戸時代末期には、お歯黒道具は欠くことのできない嫁入り道具の一つでした。お歯黒は、江戸時代に庶民生活に広くゆき渡りますが、結婚した女性のたしなみとして、いつも気をつけていたと思われます。

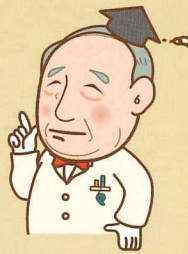
うつりかわり

現在の姿

お歯黒は、ムシ歯を予防する効果がありました。現在では、歯質を強化するためにフッ化ジアミン銀が開発されて、わが国の健康保険にも採用されています。この薬は、主として乳歯のムシ歯予防とその進行抑制のために考え出された薬剤です。

むかししまね資料館

お歯黒を塗る道具



使われた年代：江戸時代

使用した人々：御大家の女性





とくちょう

科学的に見れば虫歯予防だったと言われています。

なんだろう？

柔道着（じゅうどうぎ）のように強くて丈夫そうだね。



邑南町郷土館・安来市立歴史資料館・
飯南町歴史民俗資料館・日原町歴史民俗資料館・
浜田市金城民俗資料館など

衣

はだこ

解説

野良着（のらぎ）です。もともとハダコは「肌着（はだぎ）」のことで、肌に着け着物の下に着るもののことをいいました。しかし、野良仕事に出るときは上の着物を脱ぎ、下のハダコだけになって外に出たので、こう呼ばれるようになりました。肌に着けるハダコと野良着のハダコは、仕立て方が違い、野良着のハダコには、単衣（ひとえ）と袷（あわせ）とがあります。寒くなると袷を着ます。女性は全体として男性より長めに作られます。材料は、男女とも木綿が使われます。

うつりかわり

現在の姿

昭和になり洋服が普及すると、洋服は体に密着しているので仕事がしやすいので、野良着は洋服や古洋服に代っていきます。昭和50年代になると、作業用の服が普及していきます。

作業のとき上体に着ける



使われた年代：1970年頃まで

使用した人々：農家



とくちょう

作業衣です。


なんだろう？
この形からフードを連想できそうだけど、どんな使い方をしていたのかな。

浜田市金城民俗資料館・邑南町郷土館など

衣

あんぼうし

解説

雪が降る時に防寒用具として頭に被り、雪、雨、風から体を防ぐ役目をしました。材料は「コウラ」という草を乾燥させたものを用います。体には蓑も一緒に羽織っていました。

うつりかわり

現在の姿

「あんぼうし」は「防寒ずきん」という被りものに代わり、昭和30年頃より防寒ずきんは、使用されなくなりました。

冬季の被りもの防寒着



使われた年代：昭和30年代頃まで

使用した人々：農家の人々



とくちょう

降雪時に頭に被り防寒着として使用しました。

むかししまね資料館

なんだろう？

今ではゴムやビニール製のものが使われているよ。



衣

玉作資料館・邑南町郷土館・絲原記念館・浜田郷土資料館・
安来市立歴史資料館・飯南町歴史民俗資料館・
日原町歴史民俗資料館・浜田市金城民俗資料館など

蓑（みの）

解説

藁（わら）でできた雨具・防寒用具で、雨や雪の降るときの野良仕事（のらしごと）に使いました。仕事着の上から蓑を肩から掛け紐（ひも）で背負うような格好（かっこう）になります。紐が首と腰のあたりについていて、首の部分の紐は胸のあたりで結び、腰の紐は前に回して結びます。田仕事では、泥水がかかっても雨水できれいに流され、心配なく仕事ができます。冬は温かく、雪がついても簡単に落とせます。材料は、藁かヒロリ草が使われ、藁には、仕事用と旅用がありました。

うつりかわり

現在の姿

昭和30年代になると、ゴム製やビニール製の雨ガッパが使われ、旅にはレンコートなどが普及して、蓑は姿を消していきます。

雨よけ、防寒具



使われた年代：1950年頃まで

使用した人々：農家の人々



とくちょう

藁でできた雨具です。

なんだろう？

衣服の上に羽織って着ていたようなんだけど、どんなふうに着ていたのかな。





衣

浜田市金城民俗資料館・日原町歴史民俗資料館・
飯南町民俗資料館・邑南町郷土館・絲原記念館など

船頭みの（せんどうみの）

解説

船頭蓑（みの）の材料は藁（わら）で作られています。内側は藁を編んで丈夫（じょうぶ）に仕上げてあります。名前のとおり河川で筏（いかだ）流し作業をする人が作業着の上に羽織って着ていました。内側が菱型（ひしがた）に編んで丈夫に作られています。蓑の材料には、コウラ、藁、イグサ製の茣蓙（ござ）、棕櫚（しゅろ）の皮などがあります。主に雨具として使用していました。コウラ蓑は山仕事や田仕事で使用、藁蓑は川仕事、茣蓙蓑は旅行き用、棕櫚蓑は山仕事に使われていました。

うつりかわり

現在の姿

蓑に替わって「マント」という防寒着になり、現在では「合羽（かっぱ）」というビニール製品の上下の雨具が使用されています。

作業着の上に羽織る蓑



使われた年代：昭和10年代まで

使用した人々：筏で川出し作業をする人



とくちょう

藁で内側が菱型に編んであるので、軽くて丈夫なみのです。

なんだろう？

毛むくじゃらで毛皮のように見えるけど、植物から出来ているんだよ。



日原町歴史民俗資料館など

衣

しゅろみの

解説

「しゅろみの」はシュロの木の皮製で、その軽さと風通しの良さが特徴です。蓑（みの）の材料は、稲藁（いなわら）、コウラ、シュロ皮等で、出来上がった蓑を、わらみの、こうらみの、しゅろみのと呼んでいます。また、製作方法は、材料をヘラ（木の皮）で編んだものと、材料の胴中をいったん細縄にし、これを網状に結んで蓑形に仕上げたものとの二通りがあります。種類も二種あり、肩紐ではおる風通しの良い普通の蓑と、豊後（ぶんご）のなば師（椎茸栽培者（しいたけさいばいしゃ））が伝えたという、山仕事に適した動きやすい密着形のものとがあります。

うつりかわり

現在の姿

使われ始めたのはいつの時代かわかりませんが、相当古い時代からと思われます。昭和20年代からナイロンやビニール製の雨合羽（あまがっぱ）が普及して蓑に代わり、昭和30年代には使われることはなくなりました。

体に直接に羽織る棕櫚（しゅろ）製の雨具



使われた年代：～1950年代頃まで

使用した人々：山仕事の人々



とくちょう

屋外作業時の雨具です。

なんだろう？ わらや竹の皮などで作っているんだよ。紐（ひも）があるということは…。



衣

浜田市金城民俗資料館・日原町歴史民俗資料館・
邑南町郷土館・絲原記念館・浜田郷土資料館・
飯南町民俗資料館・松江郷土館など

草履（ぞうり）

解説

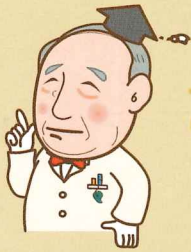
草履という履物（はきもの）で、藁草履、角結（つの）び草履、紙緒（お）草履、竹の皮草履と種類が沢山（たくさん）あります。角結び草履は、足の親指と人差し指の間に挟（はさ）む結び目の所が角結びとなっています。この草履を履（は）くとマムシ避（よ）けになると言われていました。

うつりかわり

現在の姿

草履は、屋外で使用する場合は消耗（しょうもう）が激しく、長距離を歩く場合には何足分か持参して旅をしなくてはなりませんでした。昭和30年頃よりゴム草履に替わり次第に履（は）かれなくなりました。その後、突っかけ草履やスリッパに変わってきました。

素足で履く履物



使われた年代：昭和20年代まで

使用した人々：一般の人々



とくちょう

屋外での履物で、主に農作業に使用しました。

なんだろう？

雪道や荒仕事のとき、草鞋（わらじ）と組み合わせて使っていたよ。



衣

邑南町郷土館・絲原記念館・浜田郷土資料館・
安来市立歴史資料館・飯南町歴史民俗資料館・
日原町歴史民俗資料館・浜田市金城民俗資料館など

つまご草鞋（わらじ）

雪道や荒仕事のとき足の先を保護

使われた年代：1950年頃まで

使用した人々：山仕事の人々



解説

雪道を歩くときに、足の先を覆（おお）う「わせ草履」と組み合わせて使ったほか、木出しや炭焼きといった荒仕事の時にも用いました。これをつけることで雪道も歩きやすく、足も温かくなり、重宝（ちょうほう）されました。つまごを作るには木製の木型に合わせて作り、藁（わら）を綾（あや）に編んで仕上げます。手慣（てな）れた作り手のつまご草鞋は、履きやすく足が疲れないといわれ、履く人の足に合わせて入念（にゅうねん）に作られました。



うつりかわり

現在の姿

つまご草鞋は、現在の地下足袋（じかたび）へとかわっていきました。地下足袋でも、足首までだけのものではなく、脛（すね）のあたりまで覆（おお）っている長めの地下足袋が、つまご草鞋に近いものといえます。

とくちょう

はきものです。

なんだろう？

昔の雪深い場所で使われていた履き物だよ。



衣

来待ストーン・安来市立歴史民俗資料館・鹿島町歴史民俗資料館・
飯南町歴史民俗資料館・日原町歴史民俗資料館・
浜田市金城民俗資料館・邑南町郷土館・絲原記念館など

雪ぐつ

解説

藁ぐつともいいます。積雪のあるときに履く藁で作った長靴で、雪踏み作業のときにも履きます。藁でできているために暖かく、雪の中にはまることも少ないです。脛の部分は俵編みで、沓の部分は組編みで作ります。爪先は双股式と丸形式があり、底は二重担っているものが多くあります。田舎では、普段の生活では、道路までの道あけや隣近所歩き、あるいは近くの町への買い物に履かれていました。

うつりかわり

現在の姿

稲作でできる豊富な藁という材料と、それを自家製で編んでできた気楽に履けて感触も良く、作った人の温もりが感じられる履物でしたが、ゴム長靴の普及ですっかり姿を消しました。

藁製の長靴



使われた年代 1948年頃まで

使用した人々 雪国の人々



とくちょう

藁の暖かさをうまく利用した冬用のくつです。

なんだろう？ これをつけると不思議なことに楽に歩けるよ。



衣

邑南郷土館・飯南町歴史民俗資料館・
日原町歴史民俗資料館・浜田市金城民俗資料館・
安来市立歴史資料館・松江郷土館など

かんじき（雪輪）

解説

雪中を歩くのに、足につけてめり込むことを防ぐものです。形は楕円形のものが多く、丸形のものもあります。一般に、外枠はエンジュ・ヤマヤナギ・カズラ・孟宗竹など粘りのあるもので作り、歩行しやすいように工夫されています。足が乗る横綱をノリオ、つま先をかける部分をハナオといい、二本の長紐をシメオといいます。足につけるには、紐のかけ方、結び方にもいろいろな方式があり、うまくしないと歩行中に外れることがあります。

うつりかわり

現在の姿

かんじきを作る材料は、木・かずら・竹と藁でしたが、最近の外枠は、金属製になり、紐は皮製になっています。

雪の中を歩くとき足につける

使われた年代 1950年代まで

使用した人々 山仕事をする人





とくちょう

雪の中に足がめりこみません。

なんだろう？

農家のおじいちゃん、おばあちゃんに聞けばわかるかも。



衣

飯南町民俗館・絲原記念館・
安来市立歴史民俗資料館・邑南町郷土館など

手甲（てこう）

解説

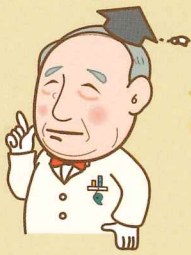
手甲は、農作業などでケガや日焼け、あるいは寒さを防ぐために、手の甲から腕にかけて覆（おお）うように作られています。特に女性が野良（のら）仕事をするときには、必ずといってよいほど使用しました。かつては、旅人や出雲巡礼（いずもじゅんれい）をする人は、白い手甲をして、杖（つえ）をもってめぐっていました。手甲を使うときには、手甲の先に糸輪（いとわ）をつけ、それを中指にかけ、中程についている紐（ひも）で手首にくくりつけて結んでいました。

うつりかわり

現在の姿

腕ぬきと手袋を一緒にしたようなものです。

手と腕を保護する腕ぬき



使われた年代：1960年頃まで

使用した人々：農作業をする人



とくちょう

手の甲を保護します。

なんだろう？

山仕事のとき“弁慶の泣き所”を守っていたんだよ。



衣

飯南町民俗資料館・日原町歴史民俗資料館・
浜田市金城民俗資料館・邑南町郷土館など

はばき

解説

「はばき」は、足の脛（すね）に当てる巻物で、山仕事に「はばき」を巻き、脛に怪我（けが）をしないようにしました。「はばき」の材料は「コウラ」という草を用いました。また、棕櫚（しゅろ）の毛を使用する場合もありました。

うつりかわり

現在の姿

「はばき」は、もともと脛の保護のための用具でしたが、「キャハン」という脛に巻くものの出現で「はばき」は消滅していきました。

仕事中に脛を守るための道具



使われた年代：昭和20年代まで

使用した人々：農家の人々



はばき編み機

参考資料

上の写真は「はばき」を編む用具です。横木であるカセには21個の編み糸の刻みがつけてあります。

なんだろう？ かなり厚(あつ)めの着物のようだね。歩くのにもこまりそうだけどいつ着ていたのかな。



浜田市金城民俗資料館・邑南町郷土館など

衣

夜着（よぎ）

解説

この夜着は、熨斗（のし）のデザインがあることから、婚礼（こんれい）用の寝具（しんぐ）です。

うつりかわり

現在の姿

夜着は、もともと毎日使用する寝具ではなかったので、大正時代頃からは木綿の絣（かすり）布団（婚礼布団）に替わっていきました。この種の布団は、客布団としても使用されていました。

布団

使われた年代：明治 時代まで

使用した人々：新婚家庭



とくちょう：特別の寝具です。

なんだろう？ 形は今も昔も変わっていないよ。現在は中に入っている綿がとても軽く、暖かくなっているよ。





衣

浜田市金城民俗資料館・邑南町郷土館・
絲原記念館など

木綿布団（もめんふとん）

解説

綿の入った木綿布団で、鶴亀の目出度（めでた）い図柄で婚礼布団として使っていたものです。古くは和紙で作った紙布製の着古した衣類をつなぎ合わせて綿の代わりにし、外側も紙布製の布団がありました。目方も相当重く、「鉄布団」と呼ばれていました。後には、中身は紙布で外側がつづれ織の「つづれ布団」が作られます。鉄布団は、明治末まで使用され、大正時代からは、木綿が主流となり「絣（かすり）布団」といっていました。

うつりかわり

現在の姿

木綿布団は、絣布団や羽根布団へと変遷しました。

寝具の婚礼布団



使われた年代：昭和30年代

使用した人々：新婚家庭



とくちょう

寝具ふとん。鶴・亀の図柄で婚礼布団として使われました。


なんだろう？
くるくる回して使ったんだよ。何だろう。

衣

日原町歴史民俗資料館・平田本陣記念館・邑南町郷土館・
飯南町民俗資料館・浜田郷土資料館・
浜田市金城民俗資料館・鹿島歴史資料館など

いとぐるま
糸車

解説

糸車の車は竹製で、台は木でできています。昔の農家では、木綿(もめん)を栽培(さいばい)し、それを綿にして、糸車で糸にしていました。糸車は、主に農家の婦人が使っていましたが、その操作(そうさ)には、かなりの熟練(じゅくれん)が必要でした。綿打屋(わたうちや)で打った綿を、糸車で一本の単糸にひき、それを撚り合わせて、木綿針のミズを通るほどの細糸に仕上(しふ)げる人もいました。また、糸車は、木綿糸だけでなく、紙布用の紙糸や繭からひいた単糸を撚り合わせて絹糸にもしました。

うつりかわり

現在の姿

使用開始年代は不明ですが、江戸時代から明治時代にかけて使われていました。昭和20年前後、日本国中物資が不足し、食料品ばかりか衣料品も配給制となり、日常の衣服の補修やボタン着けに使う糸も手に入らない時期がありました。その時、糸車を上手に使って、木綿糸を作っている婦人もありました。

糸の原料に撚(よ)りをかけて糸にする道具



使われた年代：始まり不明～1950年頃まで

使用した人々：農家の婦人



とくちょう

綿やマユ、紙などから糸をつくる道具です。

なんだろう？

竹の笊（ざる）に紙を張りつけているんだ。



食

邑南町郷土館・絲原記念館・飯南歴史民俗資料館・
安来市立歴史資料館・浜田市金城民俗資料館など

張り子（はりこ）

解説

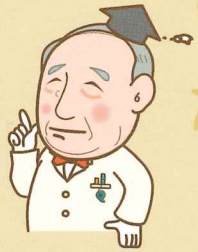
竹笊（ざる）に和紙や反古紙（ほごし）などを米糊（こめのり）で貼りつけ、その上から柿渋（かきしぶ）を塗（ぬ）った容器（ようき）です。和紙が使われているので、強くて使いやすい。また、笊の大きさでいろいろな容器が作れたので、重宝（ちょうほう）されました。笊に紙が貼ってあるので、粉のようなものも入れられ、特に穀類（こくるい）の収穫（しゅうかく）には役立ちました。貼った和紙が破けても、その上から貼り重ね、そして毎年柿渋を塗り補強（ほきょう）したので、長らく使用されました。

うつりかわり

現在の姿

米や豆類、胡麻（ごま）などの収穫には、良かったのですが、昭和30年頃からは、ポリ袋やビニール製の容器が使われだし、姿を消しました。

特に胡麻収穫に使用



使われた年代 1955年頃まで

使用した人々 農家の人々



とくちょう

和紙を貼ることでリサイクル使用ができました。

なんだろう？

竹の笊（ざる）なので風通しがいいんだよ。



食

松江郷土館・日原町歴史民俗資料館・
飯南町歴史民俗資料館・浜田市金城民俗資料館・
絲原記念館など

めしぞうき

解説

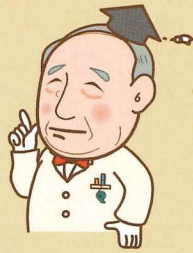
夏時分(じぶん)、ご飯がいたまないように、おひつのかわりに使いました。竹を細かく割り、編み、底には丸竹を2本平行にして取り付け、座りが安定するようになっています。上には、割竹を編んだ鉉(つる)をつけ、蓋(ふた)は竹簀(す)を使います。ご飯が炊き上がるとこの「めしぞうき」に移し、食事が終わると蓋をして日陰の風通しの良いところに吊(つ)るしておきました。「めしぞうき」の中のご飯がなくなっても、ご飯粒が少しはついているので、日当たりの良いところに出して干し、からからに乾いたご飯粒を杓子(しゃくし)で取っていました。

うつりかわり

現在の姿

そのつどご飯を炊くことができる電気炊飯器の普及で、多くのご飯を保存する必要がなくなり、姿を消しました。

竹製の釣(つり)かご



使われた年代 1960年頃まで

使用した人々 一般の人



とくちょう

風通しの良い竹で編んだもので、ご飯の保存に向いていました。

なんだろう？ 大きな桶で蓋がきっちりはまっているね。



食

飯南町民俗館・邑南町郷土館・絲原記念館・
浜田市金城民俗資料館など

はんぼ（おひつ）

解説

羽釜（はがま）で炊けたご飯を移しておく容器です。杉板を組み合わせてつくった桶（おけ）で、常に温かいご飯が食べられるように、竹か真鍮（しんちゅう）の輪で締めてすき間がないように作ってありました。柿渋を毎年塗って常に清潔に保っていました。形は円形又は楕円形で、楕円形の場合には取手がついています。大きさは、一升飯用、二升飯用が一般的で、まれに一斗（いっと）飯用がありましたが、これは田植えなど多くの人が仕事をするときに使われました。

うつりかわり

現在の姿

昭和40年頃になると、電気炊飯器が使われだし、炊けたご飯をジャーなど電気で保温します。さらに炊飯、保温の機能を備えた炊飯ジャーに代っていきます。

木製で蓋つきの桶



使われた年代：1960年頃まで

使用した人々：一般の人



とくちょう

板材をすきまなく組みあわせご飯を保温したものです。

なんだろう？ 今はカラフルなプラスチック製だけど、昔はうすく削った木の板だったんだよ。



食

飯南町歴史民俗資料館・日原町歴史民俗資料館・
浜田市金城民俗資料館・邑南町郷土館
絲原記念館など

めんぱ

柾目の杉、桧をうすく削った板を曲げて作った。



使われた年代 1930年頃まで

使用した人々 山行きの人々など

解説

弁当箱のことです。柾目(まさめ)の杉や桧(ひのき)を割って、薄い板状にし、熱湯に浸(つ)け円形とか楕円形に曲げて、その合わせ目を桜の皮で綴(と)じ、底をつけて作ります。蓋(ふた)はそれよりも少し大きめに作ります。ご飯は、身の方にいれますが、昼とコバシマ(間食)の2食分を持って行くときには、蓋の方にも詰(つ)めて風呂敷に包んで仕事場に持って行きました。おかずは、漬け物と梅干しくらいを入れただけです。質よりも量の頃の弁当箱です。



とくちょう

薄く削られた板で作られていました。

うつりかわり

現在の姿

弁当箱には、弁当行李(こうり)・めんぱ・箱弁当などがありました。弁当行李が夏に使われたのは、ご飯が腐れにくいからです。いずれにしても、大正時代にアルミの弁当箱が普及し、昔ながらの弁当箱は姿を消しました。

なんだろう？ 下の箱のようなものは落ちてくるものを溜める器だけど、どんな使い方をしていたのかな。



浜田市金城民俗資料館・絲原記念館など

食

苦汁ふね（にがり）

解説

昔は、豆腐造りに必要なニガリを食塩から採っていました。ニガリを採るために丸木をくり貫き苦汁採り船を作り、その上に食塩を入れた塩籠を置きます。長期間放置しておくと食塩からニガリがしたたり落ちニガリ船にニガリが溜まります。

うつりかわり

現在の姿

「苦汁ふね」は、昭和20年になると既製品のニガリが簡単に入手できたことと、個人の家で一度に大量に豆腐を造ることをしなくなったのでこの「苦汁ふね」は全く使用されなくなりました。

苦汁を採る道具



使われた年代：昭和10年代

使用した人々：農家の人々



とくちょう

豆腐を製造する時に使用するニガリを採る道具です。

むかししまね資料館

なんだろう？ 石の底面には溝が刻まれているようだけど、どうなっているのかな。



飯南町民俗資料館・浜田市金城民俗資料館など

食

石臼（うす）

解説

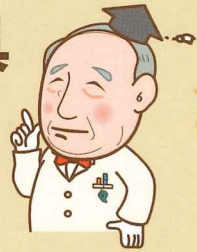
一般に穀物（こくもつ）を粉にするのに使用されました。豆腐（とうふ）にする大豆（だいず）を挽（ひ）いたり、米を挽いて団子の粉や餅とり粉にしました。二つの円筒形の石の接触面に歯がつけてあり、上の臼の穴から穀物を入れながら上の臼を回転させると穀物がすりつぶされます。上の臼には木製の取手をつけてまわします。石臼が大きい場合には取手にT字状の補助木をつけ、これを天井から紐（ひも）でつるして二人向かい合って石臼をまわすこともありました。

うつりかわり

現在の姿

製粉機の登場により急速にその姿を消しました。豆腐やきな粉、さんどの粉などは食料品店で購入するようになったため、家庭で石臼を使用する必要がなくなったからです。現在ではそばやお茶を挽く際に石臼を使用することがあります。

食品をひいて粉にする道具



使われた年代：～現在まで

使用した人々：一般の人



とくちょう

上の石を回転させることによって食品がすりつぶされます。

なんだろう？

箱の横と下から水が落ちるようになっているけど、何だろう。



食

浜田市金城民俗資料館・飯南町民俗資料館・
邑南町郷土館など

豆腐製造機（とうふせいぞうき）

解説

昔から農家は各家庭で自家製の豆腐を製造していました。大豆を一晩水に浸（ひた）してから石臼で挽き潰（つぶ）すと大豆の醐汁（ごじる）ができます。箱の内側に麻（あさ）で編んだ豆腐袋を敷いて豆腐の醐とニガリを混ぜ合わせて入れ、蓋（ふた）をして水を絞り固（しぼ）め方（かた）と出来上がります。10丁用と16丁用があります。豆腐の原料である大豆は、田んぼの畦（あぜ）で育て自家製の豆腐を作っていました。

うつりかわり

現在の姿

一度に製造できるものに10丁用の豆腐製造機があったが、16丁用のより多く造られる大型のものに変遷したほかは変化はありません。昭和30年頃からは豆腐造りの専門店ができました。

豆腐を造る道具



使われた年代：昭和30年代

使用した人々：農家の人々



左：10丁用　右：16丁用

とくちょう

昔は各家庭に一つはあった豆腐を造る道具です。

なんだろう？ 羽釜（鍋の一種）の上に置いて使うんだよ。何だろう。



食

日原町歴史民俗資料館・飯南町民俗資料館・
邑南町郷土館・浜田郷土資料館など

せいろう

解説

せいろうは木製で、板で作った四角いものと、桶式に竹の輪をかけた丸いものとの二種類があります。普通は一段、または二段重ねで使いますが、三段重ねの場合もありました。竈にかけた羽釜に水を入れ、縁に稲藁製のシブタという密閉具を置き、その上にのせて蓋をし、蒸しました。蒸すものは主にもち米でしたが、粟や黍などもこれで蒸して餅にしました。また、サツマイモやカシワモチを蒸したり、米麹用の米なども蒸しました。

うつりかわり

現在の姿

昭和30年代頃から、丸いアルミ製のせいろうが普及しました。続いて、電気蒸し器が出まわり、電気餅つき機も使われるようになりました。現在は、蒸す・つくの両機能を備えた電気餅つき機が使われるのが一般的となりました。

もち米などを蒸す道具



使われた年代：始まり不明～1960年頃まで

使用した人々：台所をあずかる主婦



とくちょう

蒸し器、食品に加工する穀類を蒸す道具です。

なんだろう？ 上と下に栓が付いていて、なにかを入れていたようだね。

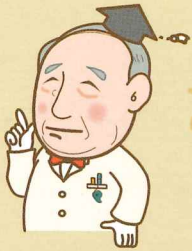


食

樽（たる）

飯南町民俗資料館・邑南町郷土館など

酒や醤油を入れておくもの



使われた年代：1950年代頃まで

使用した人々：一般の人

解説

酒・醤油（しょうゆ）・焼酎（しょうちゅう）などを入れて運搬したものです。下部の栓を抜けば中身が出る仕組みになっています。酒などはこの樽ごと購入し、家庭に置いて使い、中身がなくなると酒屋に返し、新しいものを購入しました。樽の材料には杉を使います。特に酒には杉の香りがつき、よいとされます。中でも杉の木の中心部にある「赤身」で作られた樽は、最高級とされました。香りが強いうえに、酒にほんのり赤みが移り好まれました。また、漬物や海産物を運搬する際にも、樽が用いられていました。



とくちょう

酒などの液体を保存することができます。

うつりかわり

現在の姿

家庭用・運搬用とも樽を使う光景はほとんど見られなくなりました。ガラス製の一升瓶やプラスチック製の容器がこれに取って代わっています。現在では、婚礼などの慶事（けいじ）に使われる角樽（つのだる）や鏡開きなどで樽を見ることができます。

なんだろう？ 植木屋さんの使う大きなはさみに似ているね。何だろう。



住

日原町歴史民俗資料館・飯南町民俗資料館・
邑南町郷土館・安来市立歴史資料館・
浜田市金城民俗資料館など

屋根ばさみ

解説

屋根ばさみは、草屋根を葺(ふ)くときの最後の仕上げ道具です。葺き終わった屋根を、上部から葺き草の切っ先をこのはさみで切り揃え、そこをヘラ（ハバイタ）で叩いて整形しながら屋根コグチまで下がります。さらに、屋根コグチも入念に切り揃えてヘラで仕上げます。この仕事は、草屋根の表面を奇麗(きれい)にして見た目を良くするだけでなく、葺き草を切り揃えることにより雨水の流れを良くして屋根を湿気から護(まも)り、耐用年数を長くするという、大切な役目をもちます。

うつりかわり

現在の姿

屋根ばさみは、屋根職人だけでなく、多くの農家にありました。屋根の一部が腐ったり、大風で壊れたりしたときなど、職人に頼まず、自分で葺き草を差替え、はさみで切って修理しました。近年、草葺き屋根をみることは稀(まれ)になり、屋根ばさみを手にする機会はなくなりましたが、屋根葺の技術を引き継ぐ職人たちには欠かせない道具です。

茅葺き屋根の茅を切り揃える鋏(はさみ)



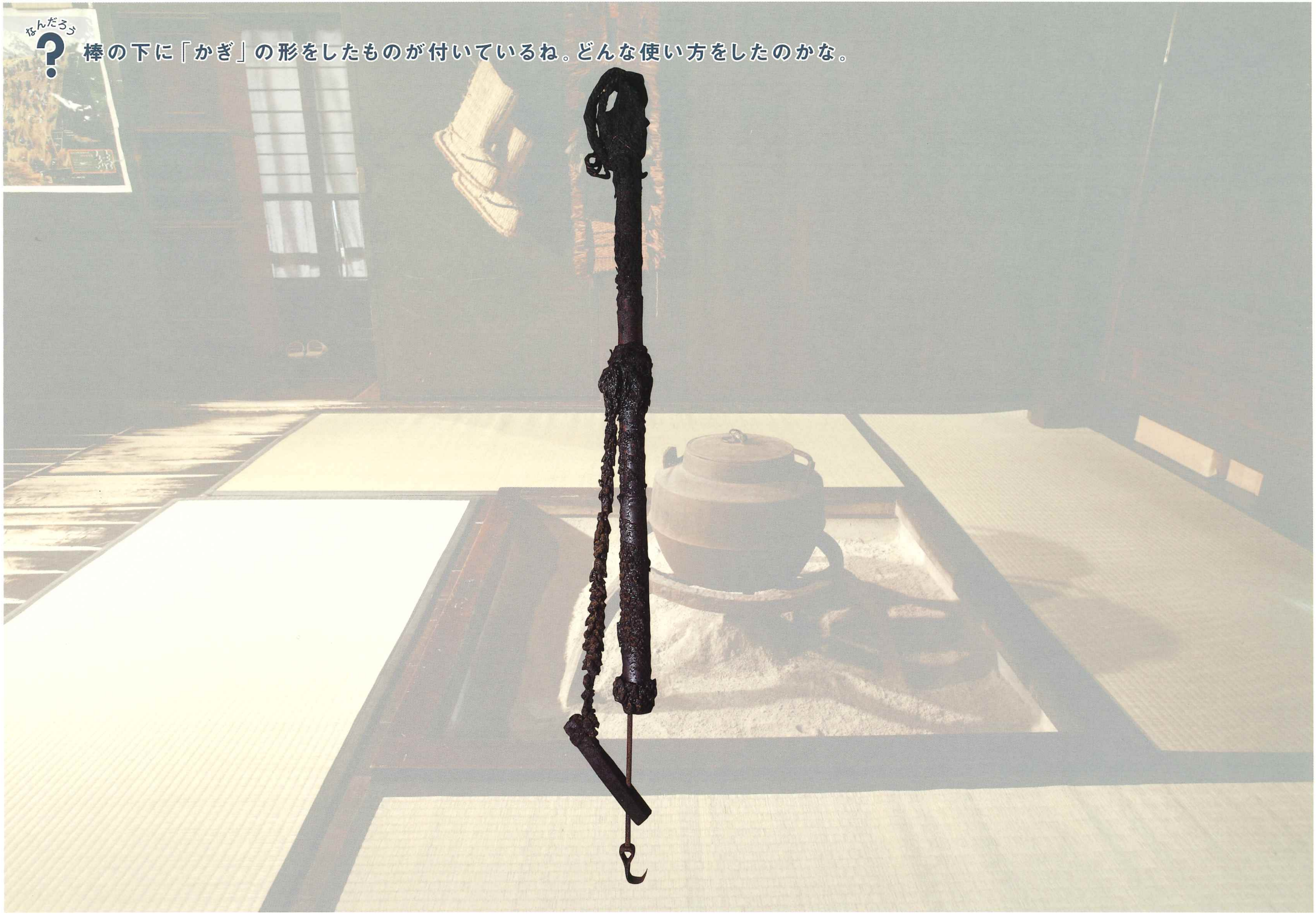
使われた年代　～現在まで

使用した人々　屋根葺職人



とくちょう

屋根を葺くときの最後の仕上げ道具です。機能的な違いがわかるといいですね。


なんだろう？
棒の下に「かぎ」の形をしたものが付いているね。どんな使い方をしたのかな。

住

浜田市金城民俗資料館・日原町歴史民俗資料館・
飯南町民俗資料館・邑南町郷土館・絲原記念館など

自在鉤（じざいかぎ）

解説

この「自在鉤」は、吊（つ）るした道具の高さが上・下自由に調整できる道具です。昔は農家の囲炉裏（いろり）には必ず一つはある道具で、自在鉤のサヤが竹製、木製、鉄製ものと種類も豊富にあります。

うつりかわり

現在の姿

「自在鉤」は、茅葺（かやぶ）き農家の「いろり端」で使用していましたが、瓦葺き屋根に屋根替えをした時点で消滅していきました。

むかししまね資料館

囲炉裏で鍋など吊るす道具



使われた年代：昭和30年代頃まで

使用した人々：農家の人々



とくちょう

囲炉裏の真ん中に天棚（たな）から「自在鉤」を吊るし、鍋、茶釜、やかん等を掛けます。

ねんだろう？ 寝相（ねそう）が良くないと、ずれ落ちてしまうこれは何だろう。



住

浜田市金城民俗資料館・日原町歴史民俗資料館・
松江郷土館・飯南町民俗資料館・邑南町郷土館・
絲原記念館・平田本陣記念など

箱まくら

解説

箱まくらは、本体の木製部分と、上部の枕部分が合体(がったい)したものです。

うつりかわり

現在の姿

「箱まくら」は、昭和20年頃から「茣蓙(ござ)まくら」や「蕎麦殻(そばがら)まくら」に替わっていきました。現在はウレタン製の低反発枕などがあります。

まくら

使われた年代：昭和20年代まで

使用した人々：女性の人々



とくちょう

昔、婦人はマゲを結(ゆ)った髪がくずれないように箱まくらを使用していました。

なんだろう？

紙（和紙）を何枚も貼り合わせたものだけど、何だろう。



浜田市金城民俗資料館・絲原記念館など

住

渋紙（しぶがみ）

解説

大きいものは部屋の六畳（じょう）の上敷（うわじ）きとしても使いました。また、穀類（こくるい）の天日干（てんぴぼ）しなどにも使われました。小さいものでは、石臼（うす）で粉を挽（ひ）くときの敷物（しきもの）としても使用していました。

うつりかわり

現在の姿

「渋紙」は、多用途の敷物でしたが、屋内で使用するものとして、上敷き用茣蓙（ござ）、そして化学製品などの「カーペット」に替わっていきました。屋外（おくがい）作業用としては、「ビニールシート」に替わりました。

敷物

使われた年代：昭和10年代まで

使用した人々：農家の人々





とくちょう

和紙を柿の渋で何十枚も張り合わせて作った敷物です。畳の上敷き、石臼の敷物などに使いました。

なんだろう？ 現在はプラスチック製になっていて、把手（とって）を持って運ぶこの道具は何だろう。



浜田市金城民俗資料館・邑南町郷土館など

住

火番たご（ひばん）

解説

いざ火災という時に、この「火番たご」を用いて消火にあたりました。玄関口に面した屋根裏の鴨居（かもい）に平行して竹を吊り、火番たごを逆さに数十個一列に吊るして非常時にそなえました。旧家などでは数多く吊るしてありました。

うつりかわり

現在の姿

「火番たご」から「ブリキ製バケツ」に、そして「プラスチックバケツ」へと替わりました。

むかししまね資料館

防火用バケツ



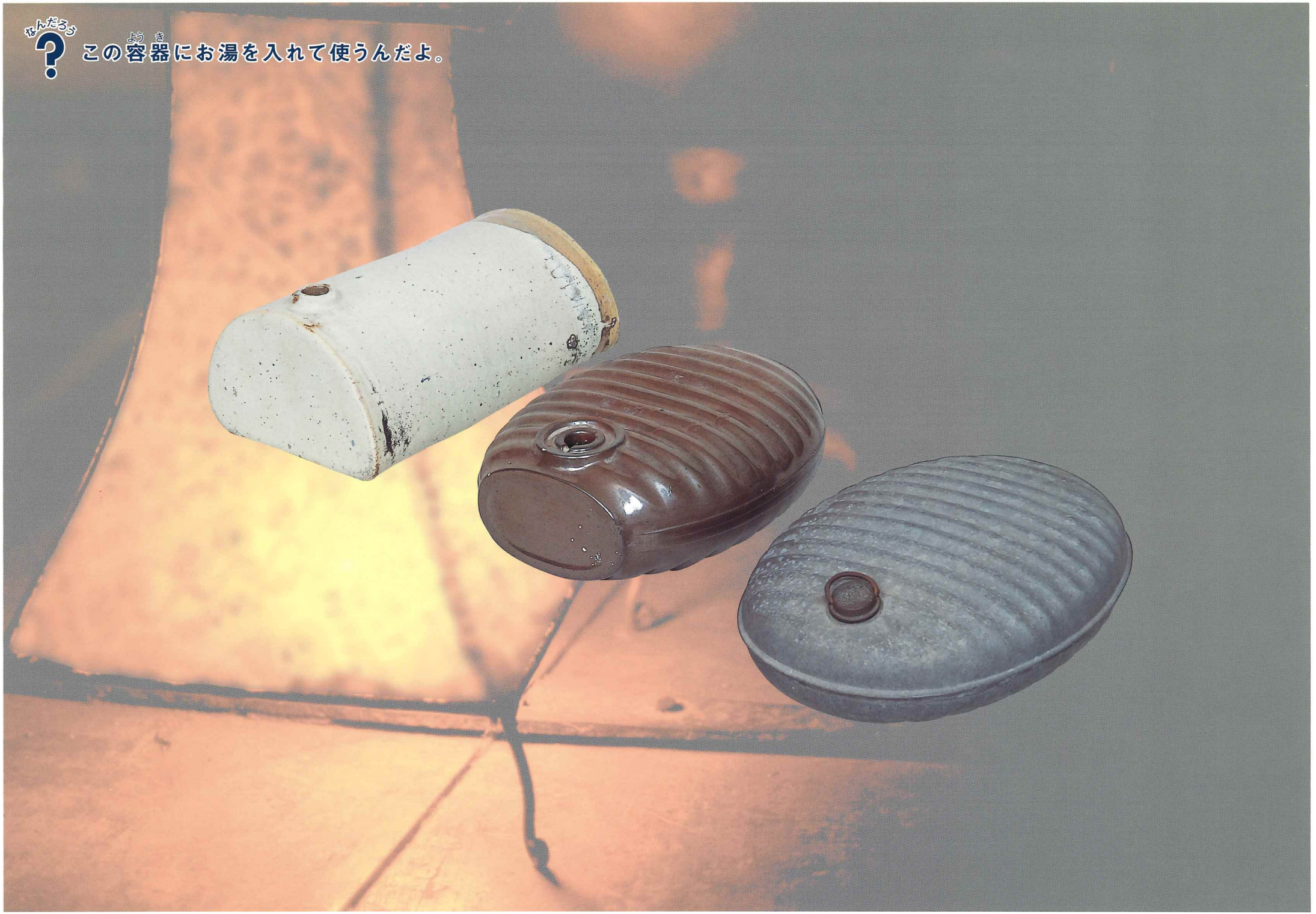
使われた年代：昭和10年代まで

使用した人々：農家の人々



とくちょう

竹籠に和紙を貼り、柿渋を塗り丈夫に仕上げてあります。火災時に水手桶（ておけ）として使用しました。


なんだろう？
この容器にお湯を入れて使うんだよ。

住

益田市立歴史民俗資料館・絲原記念館・
浜田郷土資料館・邑南町郷土館・松江郷土館・
日原町歴史民俗資料館・浜田市金城民俗資料館など

湯たんぽ

解説

古くは石を囲炉裏(いろり)の熱灰で焼いたあと、布きれに包(つつ)んで使っていました。それを行火石(あんかいし)と呼んでいました。湯たんぽは、江戸時代に中国から伝わったと言われています。タンポは唐音で、中国音の転用との説もありますが、柳田国男は、タンポは器を叩(うつわたた)いた時の音の連想と言っています。

[柳田国男「方言と昔」(『柳田国男全集』22所収、1990)より]

うつりかわり

現在の姿

明治～昭和30年頃までは、どの家庭でも使われていましたが、現在では使われていません。今日では、電気アンカや電気毛布にその役目は取って代わられました。

ふとんに入れて体を温める道具



使われた年代 ～1960年頃まで

使用した人々 一般の人



1・2―全部湯たんぽ　1―左から古い順　陶製・陶製(波形)・ブリキ製



とくちょう

焼き物の容器に湯を入れて、布で包んでふとんに入れて体を温める道具です。

なんだろう？

寒い冬に大活躍（だいかつやく）。ふとんをかけて使うんだよ。



住

益田市立歴史民俗資料館・鹿島歴史民俗資料館・
平田本陣記念館・飯南町民俗資料館・玉作資料館・
浜田郷土資料館・絲原記念館・日原町歴史民俗資料館・
邑南町郷土館・松江郷土館・浜田市金城民俗資料館など

ねこごたつ

解説

置きごたつの一種で、土製の外枠(そとわく)の中に土製の火容(ひいれ)を入れて、上から布団(ふとん)をかけて手足を温める道具です。普通のこたつよりも小形で、どこにでも置かれる便利さがあります。外枠の上部はなだらかな丸味のある箱形のもので、周囲の壁三方には穴があり、他の一方は火容の出し入れ口になっています。天井は二段になって布団に伝わる熱を緩和(かんわ)しています。

うつりかわり

現在の姿

ねこごたつの由来(ゆらい)は、布団をかけた形が猫がうずくまっているようだからとも、猫を抱えているような形になるからだとも言われています。今日では、電気アンカにその役目は取って代わられました。

炭火を利用して体を温める道具



使われた年代：1910年～1950年頃まで

使用した人々：一般の人



とくちょう

土焼きの外枠の中に行火(あんか)（土焼きの火容(ひいれ)）を置き、上からふとんをかけて手足を温めます。

なんだろう？

「やぐら」は何のためについているのだろう。火の用心！





住

益田市立歴史民俗資料館・飯南町民族資料館・
絲原記念館・浜田郷土資料館・邑南町郷土館・
松江郷土館・日原町歴史民俗資料館など

置きごたつとやぐら

解説

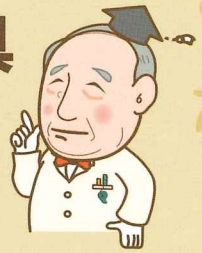
床に炉を設け、上に「やぐら」を置き、ふとんをかけて熱の放射を防ぎ暖をとるようにした効率の良い保温具をこたつと言います。これは、簡単に行火を置き、移動が自由になる置きごたつです。熱源は煮炊きに使った竈やクド、囲炉裏の燠を使ったり、火持ちがよく、値段も比較的安い炭団、豆炭、練炭もつかっていました。

うつりかわり

現在の姿

室町時代に広まり、江戸時代以降急速に普及しました。堀ごたつと置きごたつがあります。今日では熱源は便利な電気ごたつに替わってきました。また、椅子のように腰かけられる腰かけこたつも普及し始めています。

炭火を利用して体を温める道具



使われた年代：～1960年頃まで

使用した人々：一般の人



とくちょう

行火（土製の火容）を入れ、上にやぐらを置き、ふとんをかけて手足を温めます。

なんだろう？ かごのようだね。編(あ)んで作られているけど、材料は何だろうね。



日原町歴史民俗資料館など

山仕事

かんば

解説

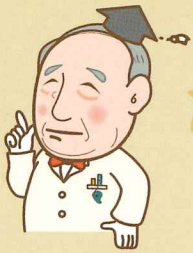
桜の木の皮とノブの木の皮で編んだ背負籠で、木挽き職人がこれに山道具を入れて背負い、山へ上がって行きました。大きさは、縦、横ともに40cm、幅12.3cmで、木の皮製とはいえ頑丈に仕上がっています。この他に「いぐり」という山行きの袋があります。「いぐり」はシュロ製で、横長の背負袋ですが、手で提げたり、木の枝などに掛けたりもできるように編んだものもあり、作りは入念にされています。

うつりかわり

現在の姿

木挽きという職業は、ごく限られた人達の専門職で、この道具を一般家庭で目にすることはありませんでした。昭和10年頃から、石油発動機を動力源とした移動製材所が山奥に入るようになり、木挽きの仕事は急激に減りました。それでもまだ昭和20年代には、木挽きが山で小規模の建築材や鉄道の枕木などを削ったりするのを見ることができました。

山行きの背負い籠



使われた年代：～1930年代頃まで

使用した人々：木挽き職人



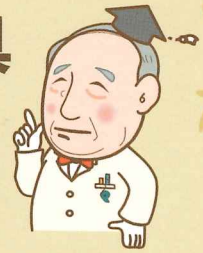
とくちょう

木挽きが小道具を入れて山へ背負って行くカゴです。

なんだろう？ いろいろな道具とそれを入れる袋だよ。どこへ持っていって使ったのかな。



山で仕事をするための道具



使われた年代 1940年頃まで

使用した人々 山で仕事をする人々



とくちょう 山での木挽き、木出し道具を持って仕事に行きました。

飯南町民俗資料館・邑南町郷土館など

山仕事

山行き道具

解説

木挽(こび)きや木出しをするためには、のこ・なた・まさかり・つまごわらじ・はばき・連尺(れんじゃく)・てかんなどさまざまな道具が必要でした。写真左は、藁(わら)で編んだ山行き道具入れという袋で、背負ったり手に提(さ)げたりしたものです。中には、山仕事で使う諸道具を入れました。木出しの際には、木に「てかん」と呼ばれる金属の環(わ)(写真)を打ち込み、連尺(肩にあたる部分は、綱が食い込まないように幅広く作られている:写真)をつないで、人力で運び出しました。

うつりかわり

現在の姿

鋸(のこぎり)で木を切り倒し、木馬(きんま)で運び出していた頃に使われた山行き道具は、伐採(ばっさい)機械の発達と架線(かせん)による木材の搬出(はんしゅつ)が主になった今では、ほとんど見ることができなくなりました。

なんだろう？

林業にたずさわる人々にとっては今も欠かせない道具のひとつだよ。



山仕事

飯南町民俗資料館・絲原記念館・邑南町郷土館・
日原町歴史民俗資料館など

まさかり

解説

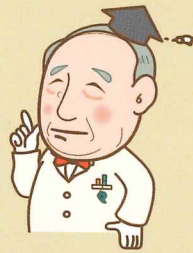
切り倒された原木を割ったり、横木を切断、また木の皮をはいだりするときに使用されました。普通、斧（おの）と言ったり、斧の大型のものを「まさかり」と言ったりします。「まさかり」にも、使用目的によっていろいろな種類がありました。

うつりかわり

現在の姿

動力機械の普及により、使用頻度（ひんど）は減っていますが、山に暮らす人々にとっては、なくてはならない道具であることは、昔のままです。

木を切る道具



使われた年代：～現在

使用した人々：一般の人や山仕事の人々



とくちょう

木に打ちこむことで切ったり割ったりできます。

なんだろう？

一般的な鋸（のこぎり）とは形や大きさが違うようだけど、なにを切っていたのかな。



山仕事

飯南町民俗資料館・絲原記念館・浜田郷土資料館・
安来市立歴史資料館・日原町歴史民俗資料館・
邑南町郷土館・松江郷土館・浜田市金城民俗資料館など

のこ

解説

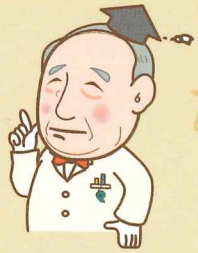
山で原木を切り倒して運び出せるような大きさに分割したり、太い枝などを切断するための鋸(のこ)です。写真上は、「板ひき鋸」とか「大ひき鋸」といって、木材の繊維に平行に切断する縦挽(たてび)きで、製材用鋸です。刃と柄の角度が深くとってあるのが特徴です。写真下は、横ひき鋸で、生木(なまぎ)を切ったときの目詰まりを防ぎ、切り粉を排出(はいしゅつ)しやすいように刃の形が工夫されています。

うつりかわり

現在の姿

チェンソーや製材をおこなう機械の発達と普及により、鋸による立木の伐採や製材は、ほとんどみられなくなりました。

木を切る道具



使われた年代 1940年代まで

使用した人々 木挽きを生業とする人々



とくちょう

木にあて引くことにより木を切ることができます。


なんだろう？
はしごのようだけど、幅の広い背負い紐（ひも）が付いているね。どうやって使うのかな。

飯南町民俗資料館・邑南町郷土館・
浜田郷土資料館・日原町歴史民俗資料館など

山仕事

きおいこ

解説

梯子(はしご)状になった部分に荷物を乗せる足が2本取り付けてあります。荷物を乗せる足と梯子の縦木(たてぎ)の部分が一本の木でできているものもありました。木の幹(みき)と枝の太さや角度が適当なものを選び、真ん中から割って作りました。木おいこには薪(まき)や炭焼き用の材木の運搬のほか稲(いね)・藁(わら)・笹(ささ)なども運びました。直接背中にあたる部分には藁で作った背あて(せなこうち・せなかち)を緩衝(かんしょうざい)材として使用していました。写真右は子ども用の木おいこです。

うつりかわり

現在の姿

写真の木おいこのほか、梯子の下の端を少し余して荷物を乗せる足を取り付けた木おいこもあり、荷を背負ったまま小休止するのに支えとなり便利だったといいます。現在は運搬車などによって運搬されることがほとんどですが、人力に頼らざるを得ない状況では骨組みが軽量な金属でできたおいこを使用することもあります。

木などを背負うための道具



使われた年代 (主に)1970年代頃まで

使用した人々 一般の人





とくちょう

薪(たきぎ)などの木のほか稲、藁など束(たば)ねたものの運搬に向いています。

なんだろう？

細長い座ぶとんのようだけど紐が付いているね。何だろう。



山仕事

浜田市金城民俗資料館・邑南町郷土館・
浜田郷土資料館・安来市立歴史資料館・
松江郷土館・飯南町民俗資料館など

背こうち（せなこうち）

解説

背中に「背こうち」を背負（せお）って、その上に荷物を乗せて運ぶ用具です。材料は全て藁（わら）です。「背こうち」の厚みのあるものは重たいものを運ぶ時に使用しました。重たい物から順番に書くと、四八（しはち）（まくら木）、割木（わりき）、刈り草、干草（ほしくさ）などです。

うつりかわり

現在の姿

「背こうち」は多種類ありますが、「荷台（にだい）」の登場により次第に消滅していきました。

背に荷物を背負う時に体との間に当てるクッション



使われた年代：昭和20年代まで

使用した人々：農家の人や山仕事の人々





とくちょう

山から荷物を運搬する用具です。

なんだろう？

袋かな。それとも籠（かご）かな。少しゴワゴワした感じだね。何だろう。



浜田市金城民俗資料館・飯南町民俗資料館・
邑南町郷土館など

山仕事

こしご

解説

「こしご」の材料は藁で、藁を綯って編みあげたものです。使用目的に合わせて大きさが変わるので、種類が豊富にあります。

うつりかわり

現在の姿

「こしご」は大変種類と用途の多い入れ物ですが、化学の発達により、プラスティック製品の「買い物カゴ」などに替わりました。

藁製の編み籠

使われた年代：昭和20年代まで

使用した人々：山仕事の人々







とくちょう

藁製品の籠です。弁当入れ、道具入れ、ワラビ採りようなど用途に多種類あります。

むかししまね資料館

なんだろう？

牛や馬にこれを引かせていたんだよ。どんな使い方をしていたのかな。



農耕

浜田市金城民俗資料館・邑南町郷土館・
日原町歴史民俗資料館・飯南町歴史民俗資料館・
浜田郷土資料館・安来市立歴史資料館・平田本陣記念館など

大床鋤（おおどこすき）

解説

田の荒起（あらお）しのときに、牛に曳（ひ）かせて使用する鋤で、鋤床の長いものが古いとされます。

うつりかわり

現在の姿

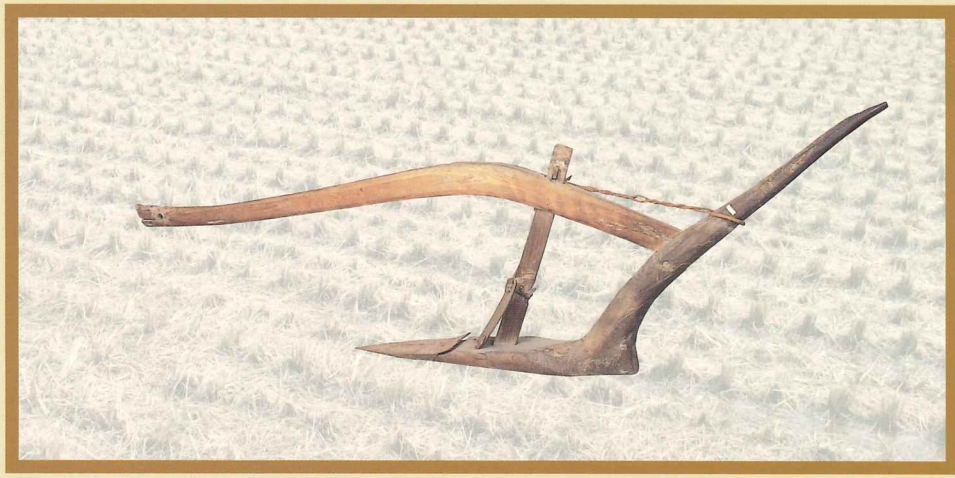
「長床鋤（ながどこすき）」から「中床鋤（なかどこ）」、そして「短床鋤（みじかどこ）」へと鋤き床の長いものから短いものへと変遷（へんせん）し、昭和30年代頃から機械化が進み、「耕運機（こううんき）」、そして「トラクター」へと大型機械化が進んできました。

荒起し用の鋤

使われた年代：大正末期まで

使用した人々：農家の人々







とくちょう

この鋤を牛に曳かせて田の荒起しをします。

なんだろう？

改良（かいりょう）されて形は変わったが、今でも農家で使われているよ。



飯南町民俗資料館・邑南町郷土館・絲原記念館・
日原町歴史民俗資料館・浜田市金城民俗資料館など

鍬（くわ）

解説

主に畑や田を耕（たがや）すための道具であり、農作業には欠かすことのできない基本的な農具といえます。写真右は一般的に風呂鍬と呼ばれ、木製の台に柄がついていて先端部分に鉄製の刃がはめ込まれています。台座が木製のためこわれやすくなっています。鉄製品の普及により刃全体が鉄製のものに変わっていきました。写真左は窓鍬といいます。刃に穴があけられており、軽量化され使いやすくなっています。また、作業中に土が鍬につきにくいという利点もあります。

うつりかわり

現在の姿

広い圃場（ほじょう）などでは耕運機やトラクターなどが使用されますが、機械が入らない小さな田畑や畦塗（あぜぬ）り、畑の草削りなどには現在でも鍬は使用されています。風呂鍬・窓鍬以外も作業の種類や土壌の硬さのよって平鍬・畝（うね）田鍬・爪（つめ）鍬などを使い分けます。

農地を耕す道具



使われた年代：1910年～現在まで

使用した人々：一般農家





とくちょう

鉄製のくわ先をうちこむことで農地を耕すことができます。

なんだろう？

緒が付いているので足に履くみたいだけど、どうやって使ったのかな。



農耕

飯南町民俗資料館・邑南町郷土館・
安来市立歴史資料館・浜田市金城民俗資料館など

大足（おおあし）

解説

大足は、田下駄ともいいます。元肥（もとごえ）を軟らかくした水田に踏み込んだり、田植え前の水田をくまなく歩き、植物の茎などを踏み込んだりします。また、小さい水田は牛が入って代掻（しろか）きをすることができないので、大足を履いた人が、整地をしました。大足の先の部分には、紐（ひも）が取りつけてあり、手で紐を引きながら足で大足を前へ送りながら進みました。

うつりかわり

現在の姿

大足と同じ形の木製品が、弥生時代の遺跡から出土していますので、大足は古くから水稲耕作に深く結びついていると考えられています。昭和20年頃までは、木製の大足しかなかったのですが、後には、下駄に鉄製の板を取りつけたものも見られるようになりましたが、農業機械の普及と水田の改良により姿を消しました。

水田を平坦にならす道具



使われた年代：1950年代まで

使用した人々：一般農家の人



とくちょう

足にはき、水田を踏み歩くことで、水田を整地します。

なんだろう？ 農耕用に飼っていた牛に付けていたようだけど、どうやって使ったんだろう。



農耕

飯南町民俗資料館・玉作資料館・邑南町郷土館・
安来市立歴史資料館・浜田市金城民俗資料館など

馬鍬（まぐわ）

解説

田植えの季節を迎えると、犁（すき）を使って水田の荒起（あらお）こしをした後、水を張り、代掻（しろか）きをおこないます。代掻きのときに、牛に引かせたのが馬鍬です。人が支え持ち、牛が引いて水田を歩くことによって土を軟らかく砕き、平坦（へいたん）にすることができます。馬鍬の幅や穂（歯）の長さも、田の土質や浅い深いにより、さまざまなものがありました。代掻きは、荒代掻き、植え代掻きなどと数回にわたってすることにより、苗を植えるのに条件の整った水田となっていきます。

うつりかわり

現在の姿

農業機械の普及により、馬鍬で代掻きをする光景は見られません。現在では、代掻きの終った後、トラクターなどに木材や梯子（はしご）を取りつけて引き、田植え前の水田を平らにならす農家もあります。

水田の代掻きに使う道具



使われた年代：1950年代まで

使用した人々：一般農家の人



とくちょう

牛にひかせて代掻きをすることができます。

なんだろう？

木のぼうのはしっこになにかぶらさがっているけど、どういう使い方をしたのかな。



農耕

たま

解説

昔の稲作は、苗代（なわしろ）で苗を育てることから始まります。ここで育った苗を抜いて小束（こたば）にし、しろかきの終った水田に移して植えます。「たま」は、苗代から掻（か）き終った水田へ苗を運ぶ道具で、水切りの良いカズラなどで作られていたが、縄製のものもありました。苗代でとった苗の小束を、二つのたまに積み上げてテンビン棒でかつぎ、あぜ道を運びました。

うつりかわり

現在の姿

たまは、上がり下りや段差のひどい山間地の棚田などには不向きで、主に平らで足場の良い水田で使われました。昭和40年代からは、育苗器やビニールハウスによる箱苗が普及し、たまなどの使用は全く無くなりました。

稲の早苗を担いで運ぶ用具



使われた年代：1960年代まで

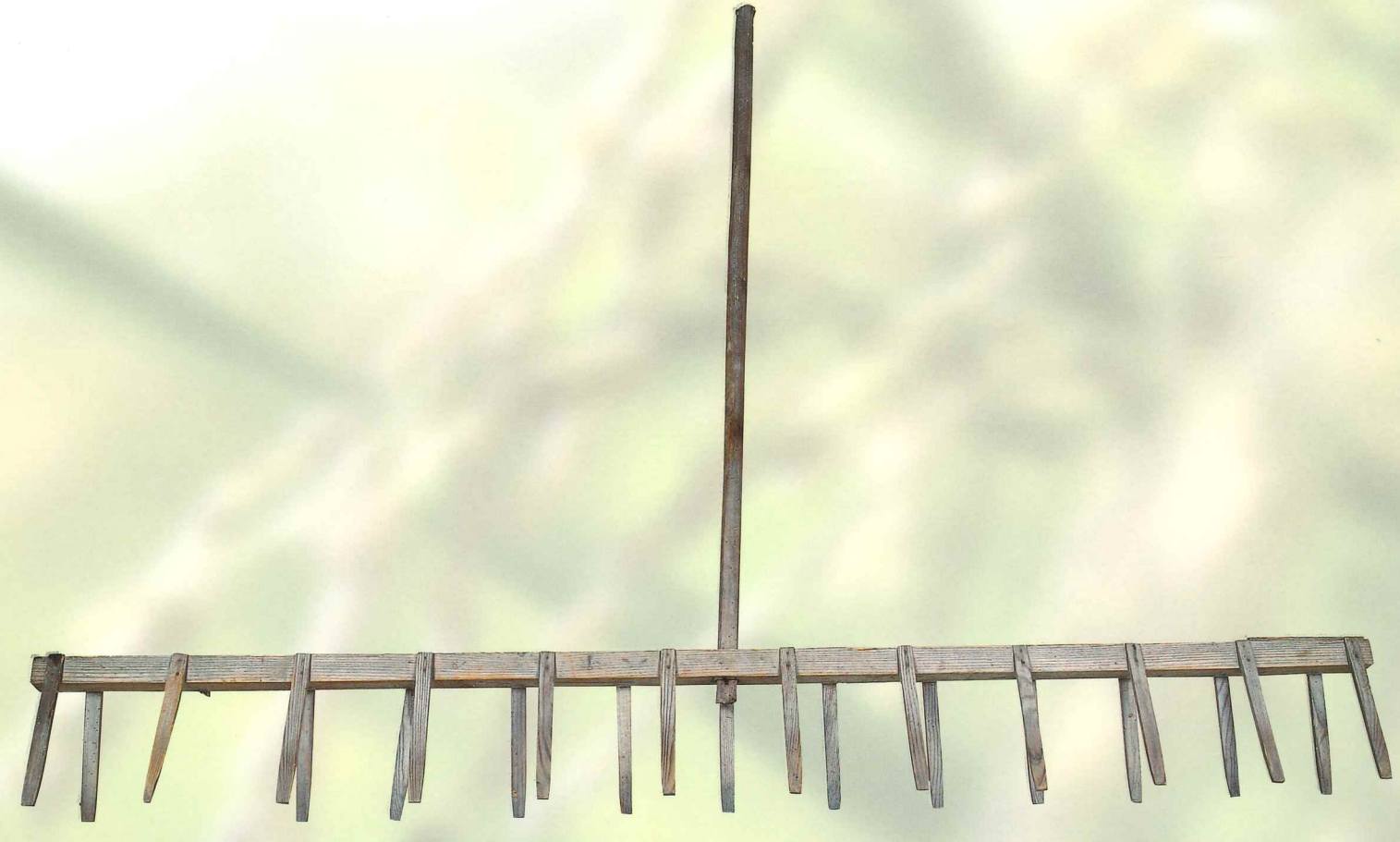
使用した人々：一般農家の人



とくちょう

稲の苗を運ぶ道具です。

なんだろう？ 足がたくさん付いているね。どうやって使ったんだろう。



農耕

飯南町民俗資料館・邑南町郷土館・
安来市立歴史資料館・浜田市金城民俗資料館など

ばばひき

解説

稲苗をまっすぐ等間隔に植えるために、これを引いて水田に線を引きました。すじつけともいいます。最初、水田に綱(つな)を張り、その綱にばばひきの端を合わせて基準としました。縦横両方向に引き、直角に交わった交点に苗を植えていきます。同様に等間隔に稲苗を植える道具として、田植綱、田植枠(わく)がありました。田植綱は綱に等間隔の結び目などの目印があり、そこに植え付けをします。田植枠は、木製の枠で、三角形や六角形のものがあり、水田を転がすと跡がつくようになっていました。

うつりかわり

現在の姿

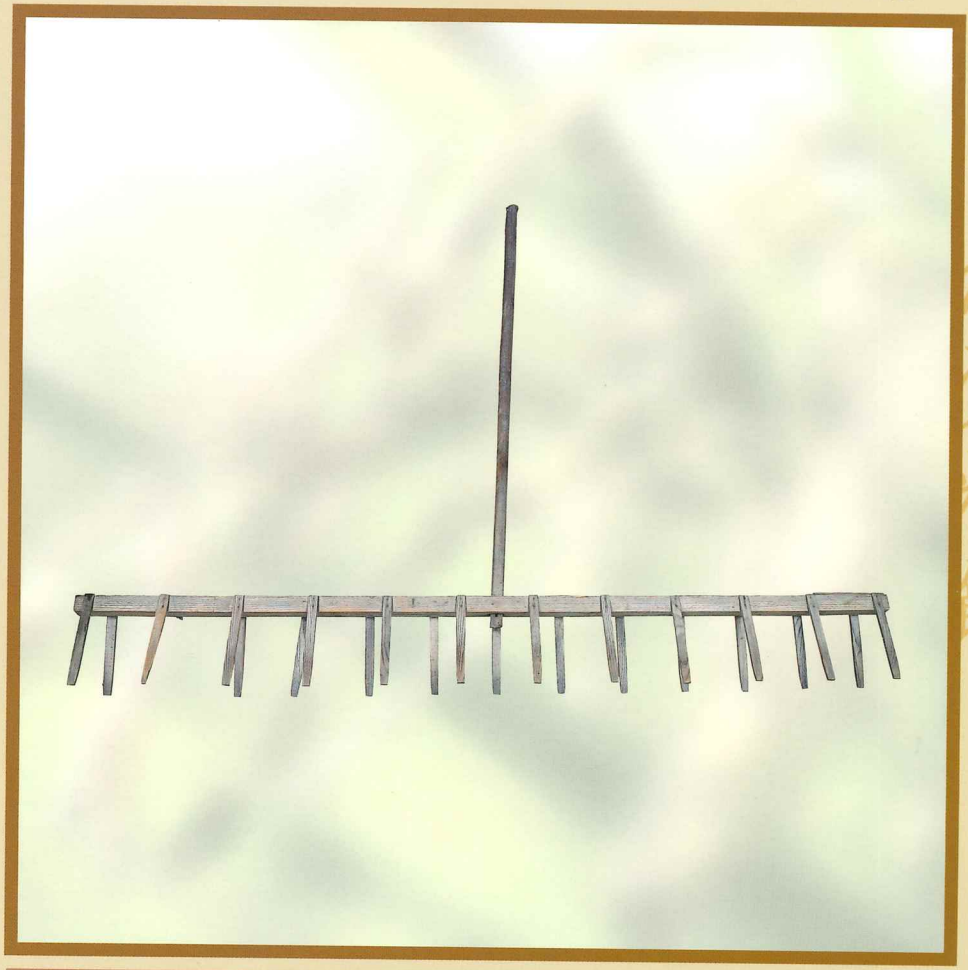
昭和50年代頃から動力による田植機が普及し始め、あらかじめ水田に目印を付ける必要がなくなり、ばばひきなどは姿を消しました。ばばひきや田植枠の使用は、田植を共同作業でおこなわず、各家でおこなうようになった昭和のはじめ頃からといわれます。

田に苗を等間隔に植えるためのもの



使われた年代：1970年代頃まで

使用した人々：一般農家の人



とくちょう

苗を植える前に人が引き、水田に線をひくことができます。

なんだろう？

ある農作業のとき使った牛の「晴れ着」なんだよ。あるときっていつだろう。



飯南町民俗資料館・邑南町郷土館など

農耕

花鞍（くら）

解説

牛供養（くよう）・花田植（はなたうえ）などの行事に用いられた鞍です。鞍は着色などをして飾られ、幟（のぼり）には家紋（かもん）が描かれました。花田植は、大田植えともいわれ、田植えが始まる最初に行なわれた大掛（おおが）かりな田植え行事です。地区内の牛を総（すべ）て集め、田に入れて一列に並んで代掻（しろか）きをしました。列の先頭を歩く牛を「さいうし（じ）」といい、この牛を使う人は、代掻きの指揮者でした。田をまんべんなく回り、列を乱さず先導（せんどう）する技量（ぎりょう）が求められ、これを務（つと）めることは名誉なこととされました。

うつりかわり

現在の姿

現在は、牛供養、花田植えとも一般的には行なわれていないため、花鞍を見ることはなくなりました。伝統行事の継承（けいしょう）を目的として近年、花田植えを復活させているところもあります。

代掻きのとき牛につける飾りの鞍



使われた年代：1930年代頃まで

使用した人々：農家の人々



とくちょう

お祝いのときにつかわれた特別な鞍です。

なんだろう？

一枚の板に約20本の釘（くぎ）が打ってあって、これを押して歩くんだよ。



田んぼの除草用具

使われた年代：大正末期頃まで

使用した人々：農家の人々





とくちょう

田んぼの草取りの道具で、体の前方で両手で押して使用します。

農耕

浜田市金城民俗資料館・飯南町民俗資料館・
日原町歴史民俗資料館・邑南町郷土館・
浜田郷土資料館など

八反ずり（はったん）

解説

一日の仕事量が八反（80a）の範囲の田の草取りが出来る、画期的（かっきてき）な除草機（じょそうき）です。一連用、二連用、三連用があります。八反ずりの田んぼの土の接地面は、一枚の板に釘（くぎ）が20本均等（きんとう）に打ってあり、この釘が田の草の根に引っかかり草が抜けました。改良されたものには、平たい鉄製の鋲（びょう）が8本交互に並び、草の茎を抜きました。

うつりかわり

現在の姿

「八反ずり」が使用されだすと田の草取りの労力（ろうりょく）も軽減（けいげん）されましたが、これを更に改良して「田車（たぐるま）」という除草機が登場しました。しかし、昭和50年代頃からは田の草を除草剤で枯らすようになってからは姿を消していきました。

なんだろう？

木の板にひもだけで裏に歯は付いていないけどなんだろう。



浜田市金城民俗資料館など

農耕

田下駄（たげた）

解説

この下駄は、稲刈りの時に湿田（しつでん）で使用します。下駄の歯はなく、一枚板の台に葛（かずら）を通して鼻緒（はなお）としています。刈り取った稲株を踏みしめ湿田にはまり込まないために使用します。主に自家製です。材質は杉の板を使用します。

うつりかわり

現在の姿

「田下駄」は農業の機械化に伴って、使用されなくなりました。したがって、「田ぐつ」という長い丈のゴム製の田靴に替わっていきました。

田んぼで履く下駄



使われた年代：昭和10年代頃まで

使用した人々：農家の人



とくちょう

湿田の稲刈りをするときに足が埋まらないように、この下駄を履き農作業します。

なんだろう？

長い歯が一列に並んでいるようだけど、どんな使い方をしたのかな。

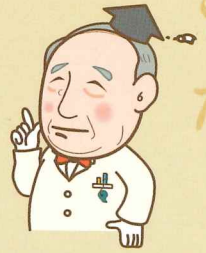


浜田市金城民俗資料館・飯南町民俗資料館・
日原町歴史民俗資料館・邑南町郷土館・
浜田郷土資料館など

農耕

千歯（せんば）

稲を脱穀する道具



使われた年代 大正末期

使用した人々 農家の人々

解説

稲を刈り取ってから脱穀（だっこく）するときに使いました。歯の本数が21本と多いことから千歯と呼ばれました。



とくちょう

稲の脱穀に使用する道具です。歯と歯の間に稲を入れて脱穀します。

うつりかわり

現在の姿

「千歯」から機械化されて「足踏（ぶ）み千歯」が登場して飛躍的（ひやくてき）な発展を遂（と）げました。さらに機械化された「脱穀機」の登場で効率がアップしました。平成時代になると大型機械で乗用の「コンバイン」が主流となりました。

なんだろう？

大きくてどっしりしているよ。上のものを回して作業していたんだけど、何だろう。



農耕

浜田市金城民俗資料館・飯南町民俗資料館・
日原町歴史民俗資料館・邑南町郷土館・
安来市立歴史資料館など

木唐臼（きどうす）

解説

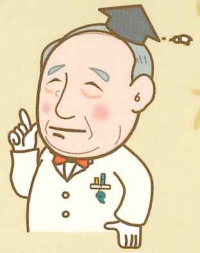
籾（もみ）を木唐臼に掛け玄米（げんまい）にする道具です。臼は下臼と上臼があり、下臼はふんばりが良いように四方に15cm幅の安定する台がついています。また、下臼には挽（ひ）いた米が一箇所に集まって落ちるバライという道具がついています。上臼は両横に10.5cmの引きガセの受板があり、引きガセに二人、臼に一人の、三人で作業する重労働でした。

うつりかわり

現在の姿

「木唐臼」は大型の樹木を必要としていましたが、これに替わるものとして「土塘臼」が造られました。昭和20年代からは、機械化された「籾摺機（もみすりき）」に替わっていきました。

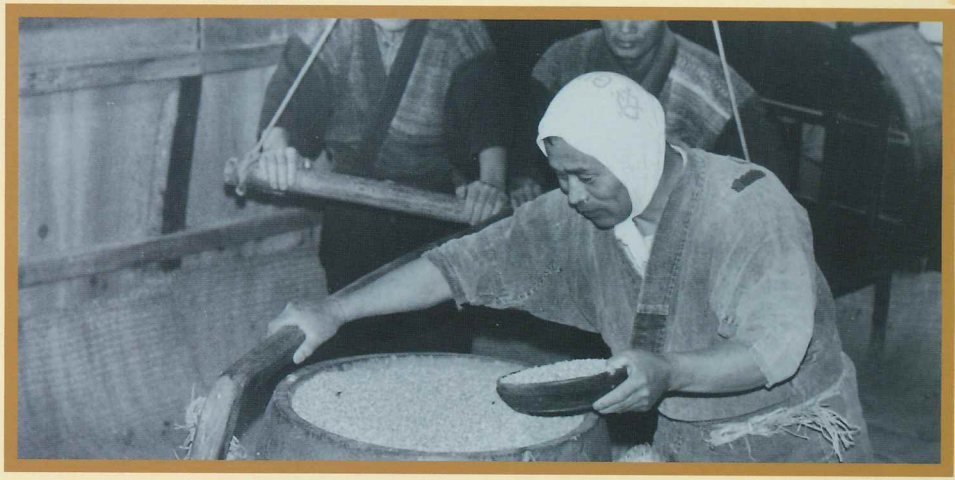
籾摺り道具



使われた年代：大正末期

使用した人々：農家の人々





とくちょう

松の大木を使って臼としています。かせを掛けて挽き回し、籾を摺（す）り玄米にします。

なんだろう？

右側の丸い部分に風車（扇風機）が付いているんだよ。

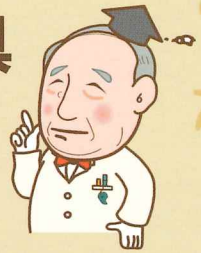


農耕

日原町歴史民俗資料館・邑南町郷土館・
浜田郷土資料館・平田本陣記念館・飯南町民俗資料館・
浜田市金城民俗資料館など

とうみ

風を送り米とチリを選別する道具



使われた年代 1980年頃まで

使用した人々 農家

解説

とうみは、内蔵されている風車を手で回して風をおこし、その風力で穀類の調整や選別をする道具です。臼(うす)でひき落とした籾(もみ)を、籾殻と米に吹き分けたり、クズ米の選別や雑穀の混ざりものを除くことなどに広く使われました。これらの作業は、「とうみだて」といい、主に女性の仕事でした。明治初期頃に、とうみを持つ農家は少数で、ほとんどが「筵(むしろ)あおち」とか「あおち」という羽根をばたつかせる器具で、用をたしていました。



とくちょう

稲や雑穀の脱穀や調整の時使います。

うつりかわり

現在の姿

手回し(てまわ)器具に直接取りつけられた内蔵羽根は大型で、その操作にはかなりの労力を必要としました。昭和初期には歯車による増幅が、昭和20年代にはVベルト車による増幅が工夫されて、風車は小型になり、その取り扱いは楽になりました。昭和初期から普及し始めた脱穀機や籾摺機(もみすりき)には、この「とうみ機能」が組み込まれており、現在はほとんど使用されていません。

なんだろう？

四角の箱と、丸い棒の組み合わせ。どうやって使うのかな。



農耕

飯南町民俗資料館・平田本陣記念館・松江郷土館・
日原町歴史民俗資料館・邑南町郷土館など

ます

解説

主に米の分量を量るもので、写真は一斗桝です。一斗桝四杯で、米俵一つ分に相当します。昔は、米の分量を重さではなく体積で量かり、年貢や小作料は米を桝で計量して納めていました。桝の上にのっている円柱状の棒は、「とかけ」とか「とぼ」といって、桝に盛られた米を平らにするものです。とかけを引くときには力を入れず、すーっと引きました。できるだけ桝に入る米を少なくしようとした工夫です。

うつりかわり

現在の姿

現在、米は重さの単位を用いて取り引きされるのが普通で、桝に変わり量りでの計量になっています。ご飯を炊くときには、一升とか五合とか嵩の単位を使いますが、桝で量り取っている家庭は多くはないでしょう。今は、プラスチックの容器などがこれに代わっています。

米の量をはかる道具



使われた年代：1970年代頃まで

使用した人々：一般の人々



とくちょう

一斗分の米を量ることができます。

なんだろう？

たくさんある小径木片（しょうけいもくへん）は8個で一組になっているけど、どうやって使っていたのかな。



日原町歴史民俗資料館・邑南町郷土館・
安来市立歴史資料館など

農耕

こませとつつろ

解説

こませは木製で、木の又で作った二本の足に、俵の寸法を刻んだ板が渡してあります。また、つつろは、小径木を適当な長さに切り、中央が最も細くなるように削り込んであり、一組が八個あります。俵を編むときは、俵の大きさごとに切った四本の小縄を二重にし、両端からつつろに巻いた後、こませに振り分けに掛け、これに稲藁をあてて編み始めます。俵の大きさは、四本の小縄の長さと、こませに刻まれた、つつろを掛ける切り込みの位置により決まります。

うつりかわり

現在の姿

米、又は籾俵の他、櫨俵や炭俵、菰等もこれで編みました。使い始めは何時の時代か分かりませんが、昭和30年代、米俵がカマスや、紙袋に代わるまでは、農家の重要機具の一つでした。炭俵は茅の茎で作るため、硬くて折返しに苦労しましたが、昭和20年代に炭俵専用のこませができ、楽になりました。

米俵・炭俵・菰を編む道具



使われた年代 1950年代頃まで

使用した人々 農家の人々



とくちょう

俵やコモを編む道具です。

なんだろう？ 長いひも（縄）がたくさんぶら下がっているね。この道具で何をするのかな。



農耕

浜田市金城民俗資料館・日原町歴史民俗資料館・
邑南町郷土館・安来市立歴史資料館など

むしろ機（ばた）

解説

農家の必需品（ひつじゅひん）である敷物（しきもの）の「むしろ」を編む道具です。むしろは、農家の敷物で、特に囲炉裏（いろり）の間の敷物として重宝（ちょうほう）されていました。農作業をするときには道具・用具の敷物として、穀物（こくもつ）の天日乾燥（てんぴ）時には敷物として用いました。各農家に一台は、むしろ機がありました。

うつりかわり

現在の姿

昭和30年代からは、住まいの形態（けいたい）も変わり、屋内での敷物は茣蓙（ござ）や畳に替り、農作業にも「むしろ」を使用しなくなったので、「むしろ機」は自然と消滅していきました。

むしろを編む道具



使われた年代：昭和20年代頃まで

使用した人々：農家の人々



とくちょう

藁製のむしろを編む道具です。

なんだろう？

長い刃が付いているよ。どうやって使うのかな。



農耕

浜田市金城民俗資料館・日原町歴史民俗資料館・
松江郷土館・飯南町民俗資料館・邑南町郷土館・
浜田郷土資料館など

押切（おしきり）

解説

昔は、「押切」で藁を4～5cmの長さに小さく切って牛に餌として与えていました。麻や楮の木を一定の長さに切って「こしき」で蒸し、皮を剥ぐためにも「押切」で裁断していました。

うつりかわり

現在の姿

「押切」に代わるものとして現在では、「電動鋸」があります。

藁や木を何本もまとめて切る道具



使われた年代：昭和20年代頃まで

使用した人々：農家の人々

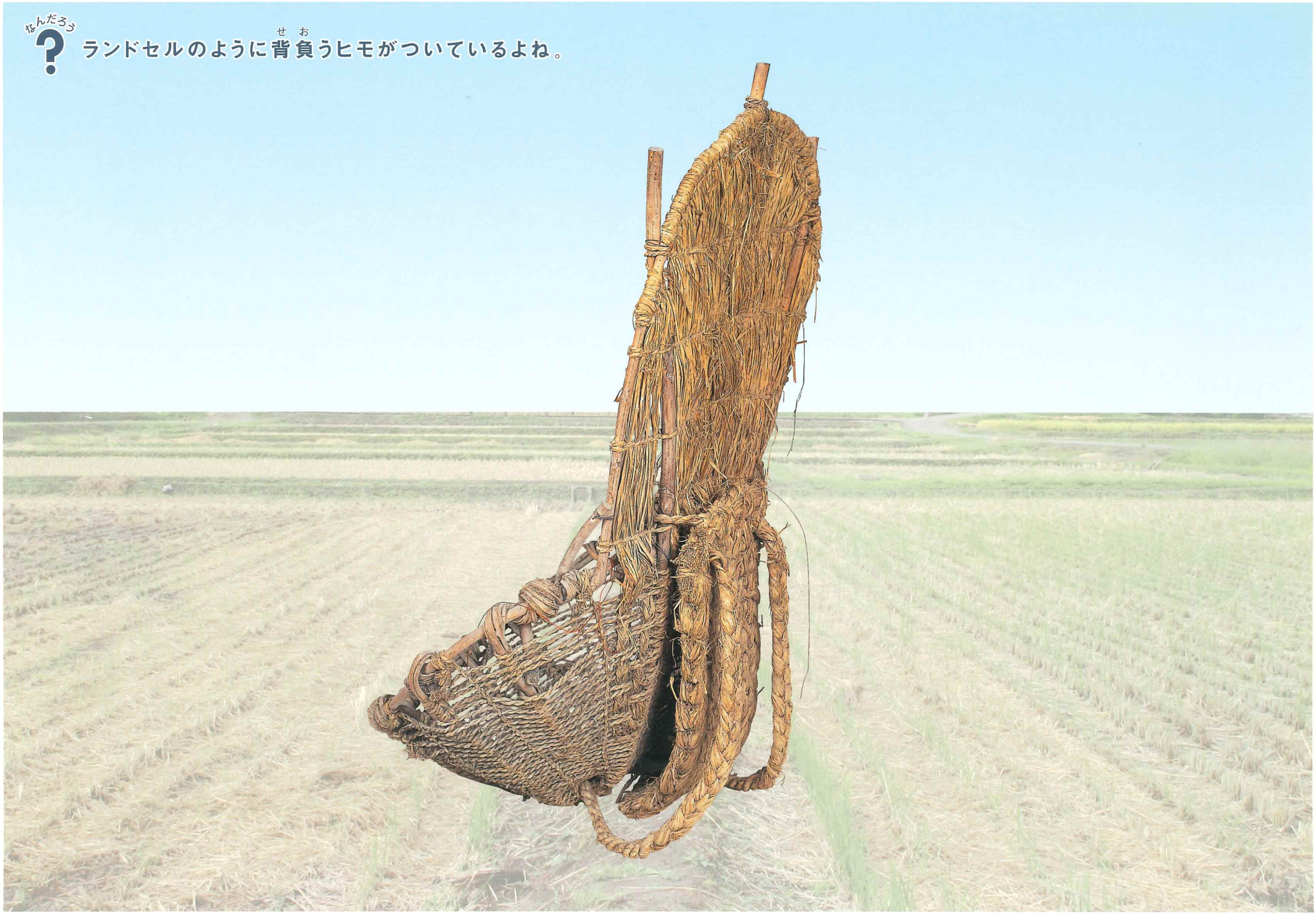


とくちょう

藁、麻、楮などを一定の長さに押して切る道具です。

なんだろう？

ランドセルのように背負うヒモがついているよね。



飯南町民俗資料館・邑南町郷土館など

農耕

おいこ

解説

竹や細い木を骨とし、縄や藤かずらなどを編んで作った円形の籠状のものに、背負い紐と藁の背あてを取り付けたもので、「もくおいこ」ともいいます。おいこの背中を背負ったままでも体を傾けるだけで堆肥が落とせるように籠があらかじめ斜めに取りつけてあります。おいこの網目を密にし、土を積んでも漏れないようにしたものを「つちおいこ」といい、土を背負って運ぶおいこに「どろおい」という木製箱型のおいこもあります。

うつりかわり

現在の姿

小規模に堆肥や土を運搬するときは、手押しの一輪車で行なうことが多くなり、ほとんど使用されなくなりました。堆肥や土を人力で運搬する機会も少なくなり、運搬車などで行なう場合が多くなりました。

堆肥や土を運ぶ道具



使われた年代：1960年代頃まで

使用した人々：農家の人々



とくちょう

堆肥を田にまくため、おいこで運搬しました。


なんだろう？
口が大きくて投げ入れるのに適(てき)しているんだ。何だろう。

日原町歴史民俗資料館など

農耕

ほぼろ

解説

ほぼろは、稲藁をコモ編みにして作ったカゴ形の入れ物です。縁から渡した綱弦がありその綱弦の中央に木の枝又などで作った大きなカギがついていることが特徴です。地上でも使われましたが、ハゼの実や柿などを収穫するときに、このほぼろを樹上に持って登り、近くの幹や枝にカギを掛けて吊るし、収穫物を投げ入れました。これが一杯になると、長い綱に吊るして地上に下ろしました。家の中では吊るして、小物入れなどに利用されました。

うつりかわり

現在の姿

ほぼろが最も使われたのは、櫨の実の収穫時です。櫨とりは樹上の仕事なので、この道具がないとできませんでした。櫨の実が収穫されたのは、昭和10年代頃までで、その時期を過ぎるとほぼろは柿や柚など収穫に使われていましたが、次第にその姿を見せなくなりました。

柿の実を採る時に使用した藁製の籠



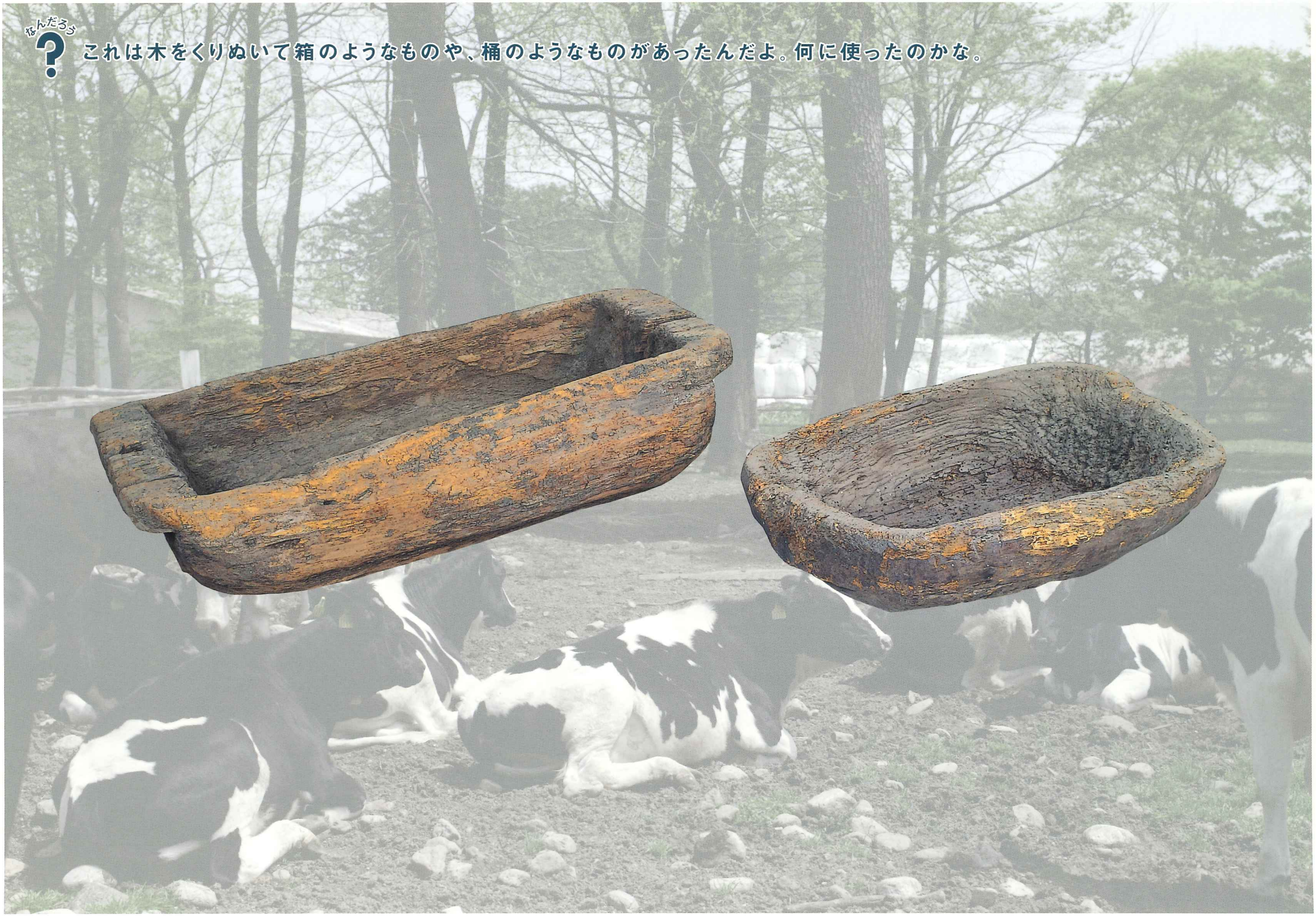
使われた年代：江戸期より1940年代頃まで

使用した人々：農家の人



とくちょう

稲藁製のカゴ状の道具で、樹上で収穫時に使うのに適しています。


なんだろう？
これは木をくりぬいて箱のようなものや、桶のようなものがあったんだよ。何に使ったのかな。

浜田市金城民俗資料館など

農耕

飼馬桶（かいばおけ）

解説

大きい方は成牛用、小さい方は子牛用の餌（えさ）用の桶です。材質は栗の木で、中を刳り貫（くぬ）いています。牛や馬一頭につき一つの飼馬桶で、一回に食べる分量の餌を入れていました。

うつりかわり

現在の姿

丸木を刳り貫いて造った「飼馬桶」は、長方形の「餌盥（えさたらい）」、または円形の餌盥の「飼盥（かいだらい）」へと替りました。

むかししまね資料館

牛・馬の餌箱



使われた年代：昭和20年代頃まで

使用した人々：農家の人々



とくちょう

牛や馬の一回分の飼料をこの桶に入れます。

なんだろう？ 牛や馬の背に付けて使っていたんだけど、なんだろう。



農耕

浜田市金城民俗資料館・島根県立博物館・邑南町郷土館・
日原町歴史民俗資料館・浜田郷土資料館・
安来市立歴史資料館・松江郷土館・飯南町民俗資料館など

荷鞍（にぐら）

解説

昔は、農家は、家畜（かちく）として牛馬両方を飼育（しいく）していました。特に牛は役牛（えきぎゅう）として農閑期（のうかんき）に荷鞍を付けて鉄穴場（かんなば）から、たたら場まで、砂鉄を運んでいました。馬は毎朝、草刈山から芝草や薪（まき）を運搬しました。また、砂鉄の運搬も行っていました。

うつりかわり

現在の姿

「たたら」の衰退（すいたい）で、牛馬による運搬（うんぱん）の手段が必要でなくなったために、荷鞍は使用されなくなりました。

牛・馬の背に付ける荷物を載せる鞍



使われた年代：明治 末期

使用した人々：農家の人々





とくちょう

牛馬の背に付けて鞍の両側に荷物を載（の）せ運搬するのに重宝（ちょうほう）でした。

なんだろう？

暗い夜の海でも漁師さんはこれを使ってがんばるんだよ。



西ノ島町歴史民俗資料館など

漁撈(海)

カンテラ

解説

夜の海で、光に集ってくるという魚の習性を利用して魚を取る漁法で使われたのがこのカンテラです。昔くは舟の上でたいまつを燃やしていましたが、石油ランプが発明されると、それを漁業にも利用し、カンテラとして使いました。現在は、船のエンジンで電気を起こし、それを集魚灯(しゅうぎょとう)として使っています。1つの船の集魚灯でも、野球場のナイターのような明るさになります。

うつりかわり

現在の姿

たいまつからカンテラ、カンテラから電気の集魚灯と変ってきました。最近では、最先端の発光ダイオードを活用する研究も進められているそうです。

夜の漁業の照明具



使われた年代 明治～昭和

使用した人々 漁民





とくちょう

魚の習性をうまく利用して、夜間にも漁が行なえます

なんだろう？

何のための明かりかな？今でも見ることができるよ。



浜田市浜田郷土資料館・隠岐郷土館・
絲原記念館など

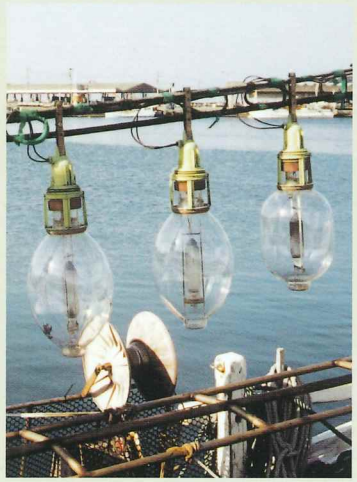
漁撈(海)

集魚灯（しゅうぎょとう）

解説

昔の漁業、特に夜間の漁撈活動では、魚群を集めるための照明は、現在のような発電装置やバッテリーによる非常に明るいものではなく、薄暗く、雨風に弱いもの（ローソク、松明（たいまつ）など）でした。時代の流れとともに工夫、改良され、昭和初期にはカーバイトを燃料とするランプとガスタンクが対（つい）となったものとなり、そして現在の電灯（でんとう）へと変化していきます（写真は、昭和初期の集魚灯）。

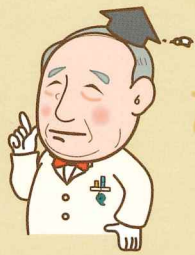
うつりかわり



現在の姿

現在使用されている集魚灯は、イカ釣船に代表されるように、発電装置を船内に装備し、軽量で非常に明るい電球を多く使用して大量漁獲の一役を担（にな）っています。写真は、浜田漁港に停泊中のイカ釣船にみられる集魚灯です。

魚を集めるための道具



使われた年代：1926～1946年頃

使用した人々：漁業で生計をたてる人（漁師）



とくちょう

昭和の初期、船上で魚を集めるための明かりとして、カーバイトを燃料とするガス灯が使われていました。

なんだろう？

口は小さく底は広いね。フタも付いているけど何だろう。



日原町歴史民俗資料館・飯南町民俗資料館など

漁撈

うなぎかご

解説

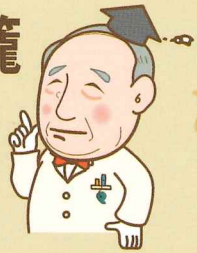
うなぎは鮮度が大事なので、釣ったうなぎはうなぎカゴに入れ、生かして持ち帰りました。うなぎかごは、肩を平たく横に張り出してカゴ底を広くし、中で重なりを防ぐ形になっています。うなぎには、逆立ちをして逃げ出す習性があり、このような形にすることで、逃げ出しも防げました。さらに、うなぎかごの口には、エサカゴをはめ、その上からフタカゴをして結び、厳重な口仕舞となっています。このかごは、うなぎの持運びだけでなく、カゴを水に浸けてイケスにも使われました。

うつりかわり

現在の姿

使われ始めたのは、江戸時代と思われます。近年までうなぎ釣りの人が持ち歩いているのが見かけられています。現在のうなぎかごは、大型のプラスチック製で、モジなどで捕ったうなぎを竹製のカゴに入れて、生かしているのが見かけられます。

うなぎを捕獲した時に一時保管する籠



使われた年代 ～1980年代頃まで

使用した人々 うなぎ釣りの人



とくちょう

うなぎが逃げ出さないように口がせまく作られています。

なんだろう？

この道具で色々な獲物をゲット！突いたり引っかけたりと大活躍。どんな場所で使われているのかな。



隠岐郷土館など

漁撈(海)

やす

解説

隠岐は豊かな海の資源に恵まれた島です。漁民は、かんこと呼ばれる小型の和舟(わぶね)で海に乗り出し、サザエ、アワビ、和布(わかめ)、魚などを収穫しました(隠岐では、かなぎ漁と言っています)。この4つのヤスは、かなぎ漁で使われている代表的なもので、舟の上から箱メガネで海中の獲物を見つけ、このヤスで突いたり、引っかけたりして漁をしました。三又(みつまた)のものは、魚、サザエ用、カギ型はアワビ用で、竹で作られた柄(え)も含め全体の長さは7m以上にもなります。

うつりかわり

現在の姿

舟が木製からプラスチック製のものに変ったりしていますが、ヤスは鉄でできており、変化はありません。なかには、さびにくいステンレス製のものを使っている人もいますが、漁師さんは、「鉄製のものが使い易(やす)い。」と話していました。

魚、サザエ、アワビなどを獲る道具



使われた年代 ～現在

使用した人々 漁民



とくちょう

海の獲物をこれでゲットします。

なんだろう？ 海底の岩場で1m以上も成長するものを、この長い柄の先に付いている鎌で引っかけて採るんだよ。



隠岐郷土館など

漁撈(海)

和布鎌（わかめがま）

解説

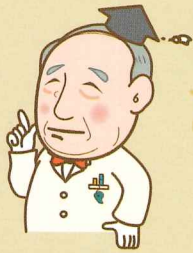
3月から5月にかけて、和布漁（わかめりょう）が最盛期となります。海底の岩場に生えている和布を刈り取るときに使うのが、この和布鎌です。1m以上にも成長した和布の根元をこの鎌で刈り、それを引っかけ舟に引っぱり上げます。舟一杯になれば港に帰り、干（ほ）し和布、塩和布、板和布などを作ります。この時期、隠岐の漁村では、あちらこちらに和布を干す風景が見られます。

うつりかわり

現在の姿

最近では、養殖による和布漁も行なわれるようになりましたが、かなぎ漁で行なわれる和布漁では、昔も今もこの和布鎌は欠かせません。

和布を刈り取る専用の鎌



使われた年代 ～現在

使用した人々 漁民



とくちょう

深い海底にはえる和布をとるために、長い柄の先に鎌が付いています。

なんだろう？

真ん中にある石のおもりを使って海の上からあるものを捕まえるために使っているよ。



漁撈(海)

隠岐郷土館・海士町歴史民俗資料館など

海鼠落とし（なまこおとし）

解説

水深が10m以上の割と深い場所にいるナマコを取るときに、この道具が使われました。5～12本のモリの根元（ねもと）に石の錘（おもり）を付け重くし、海底のナマコの上に落として取る漁法です。深い場所での漁は、潮の流れや舟が風の影響を受けるため、熟練（じゅくれん）の技を要する漁法だといわれます。隠岐のナマコは歴史が古く、奈良時代にも都へ運ばれたと記録にあります。その時代には、どんな漁法でナマコを獲（と）っていたのでしょうか。

うつりかわり

現在の姿

このナマコ落しのように、突き刺す道具ではナマコを傷つけてしまうことから、最近ではあまり使われなくなり、今頃では、ヤスの先に網を付け、その玉網（たも）ですくい取る方法が多いようです。

海鼠を捕る専用の道具



使われた年代：～現在

使用した人々：漁民





とくちょう

石の錘で重くして、ねらいを定めます。

なんだろう？ えびで鯛（たい）、ごんがらで○○といわれるほど。形を変えて今もたくさんのファンが使っているよ。



隠岐郷土館など

漁撈(海)

おどりこ、えびがた、ごんがら

解説

江戸時代の終り頃から隠岐ではイカ漁が盛んとなりました。イカをスルメに加工し輸出品としました。そのイカ漁に使われたのが、これらの道具です。主に、ごんがらはスルメイカ、えびがた(えぎ)はアオリイカ、おどりこはケンザキイカに使われたということです。えびがたやおどりこを水中で動かし、小魚やエビが泳いでいるように見せ、エサとまちがえて飛び付いたイカを、先にある沢山の釣で引っかけて取りました。

うつりかわり

現在の姿

最近、ルアーフィッシングが流行(りゅうこう)していますが、このえびがたやおどりこは、日本のルアーのルーツと言えます。えびがたは桐(きり)の木や鳥の羽根で作られていましたが、最近はプラスチック製のものに変ってきました。

イカを釣るための疑似餌(ぎじえ)(ぎじえ)



使われた年代 ～現在

使用した人々 漁民



とくちょう

えびで鯛(たい)、ごんがらでイカといわれています。

なんだろう？

海底で動いている○○○をこれで一網打尽だ。



隠岐郷土館など

漁撈(海)

海鼠引き網

解説

内海や湾内の砂地にいるナマコをとるための網です。この網を海底に沈め、舟でゆっくりと引っ張り海底をさらい、網の中にナマコをすくい取る漁法です。弓形をした木枠に木綿製の網を取り付け弦の部分には鉄製の鎖や石の錘りをつけて海底をさらうのに適した作りとなっています。網も余裕をもたせた張り方をしており中に入ったナマコが出にくい作りとなっています。

うつりかわり

現在の姿

かなぎ漁をする漁師さんが高齢化し、最近ではあまり使われないようになりました。

海鼠漁専門の網



使われた年代 ～現在

使用した人々 漁民



とくちょう

海底にいるナマコをこれで一網打尽にします。

なんだろう？

底は針金で目の大きなカゴ状になっているんだ。だから余分（よぶん）なものは落ちるんだよ。



宍道蒐古館など

漁撈(淡水)

ジョレン

解説

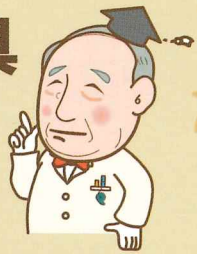
①は昭和20年代のジョレンです。蜆を獲る部分は針金をカゴ状に組み合わせており、それに浮力のある杉材の柄を付けて、湖底の蜆を掻き上げました。②は昭和30年代のジョレンです。昭和30年代になると動力船が導入され、船を動かしながらの蜆掻きが行われるようになりました。船での操作性を考慮し、柄が杉材から竹に変わっています。

うつりかわり

現在の姿

柄は竹より軽いグラスファイバーに変わり、カゴも動力の強い船で掻いても壊れないように、溶接のしっかりしたものとなりました。カゴの網目を細くすると小さい蜆まで獲れることから、網目をやや幅広にしたりして、資源保護に努めています。

宍道湖で蜆を獲るための道具



使われた年代：昭和20～30年代

使用した人々：蜆とりの人々



①



②

とくちょう

蜆を獲る道具で、カゴの網目を調節して小さい蜆をとらない工夫などしてあります。

なんだろう？

出し入れできるように蓋が付いているんだよ。



漁撈（淡水）

益田市立歴史民俗資料館など

鵜籠（うかご）

解説

鵜飼（うか）いには、鵜に手綱（たづな）をつけて、かがり火を川面（かわも）に照らし鮎（あゆ）を捕らせる舟鵜飼いがよく知られています。高津川の鵜飼いは、手綱を使わず、川岸より鵜を放し漁を行う放し鵜飼いです。川に鵜を自由に放し魚を捕らせ、獲物が喉（のど）にたまった時をみはからって、鵜を呼び戻し魚を吐き出させる漁法です。このかごは、竹を編んだものです。鵜を川漁（かわりょう）に連れて行く時に使います。また、鵜を捕獲する時にも捕まえた鵜を入れます。

うつりかわり

現在の姿

高津川の放し鵜飼いは、平成13年、益田最後の鵜匠塩田嘉助さんが亡くなり、絶滅しました。長良川（岐阜県）や岩国（山口県）で観光として鵜飼いを見ることはできますが、全国で唯一行われていた伝統漁法としての鵜飼いは、現在見ることはできません。

鵜の鳥を運ぶかご



使われた年代：2000年まで

使用した人々：鵜匠（故塩田嘉助）



とくちょう

軽くて強い竹で作った鵜の鳥を運ぶものです。

なんだろう？

形は丸ではなく、平たくて横長で、長いヒモも付いているよ。



日原町歴史民俗資料館・飯南町民俗資料館など

漁撈(淡水)

こしかご

解説

こしかごは竹製で、普通のカゴとは違って、縦に平たく横長です。この形は、釣や網漁やサグリのときに、カゴを腰に着けて両手を解放し、魚取りに専念できるように工夫された形です。また、カゴを平たくすることで、中の風通しを良くし、中の魚の重なりなども調節して、蒸(む)れや腐(くさ)りから魚をまもります。入り口は、シュロ皮で作った逆口(さかぐち)という仕掛(かが)けで、屈んでも入れた魚が出ないようになっています。

うつりかわり

現在の姿

こしかごは、ほとんどの川漁に携行(けいこう)されましたが、特に川中での網漁では、腰に着けて両手を解放されることと、水切りの良いことで欠かせない道具で、現在も使用されています。

捕獲した魚を一時保管する籠



使われた年代 ～現在

使用した人々 川魚をとる人



とくちょう

とった川魚をいれる道具です。

なんだろう？

細長い網だね。どうやって使ったのかな。



宍道蒐古館・浜田郷土資料館など

漁撈(淡水)

モンドリ

解説

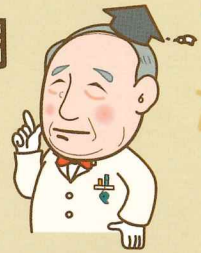
モンドリは、コイ、フナを獲る道具です。竹と網でできており、細長い筒状の網に一ヶ所のカエシがついています。モンドリの口に2本、先端に1本の竹柱がついており、それを湖底や川底につき立てて仕掛けます。湖に注ぐ河口の流れに仕掛けますが、主に斐伊川の河口で多く用いられました。

うつりかわり

現在の姿

これに変わるものは現在ありません。

斐伊川の河口付近でコイ・フナを獲る網



使われた年代 ～現在

使用した人々 漁師の人々



とくちょう

水中で泳いでいるコイやフナをとるために工夫されています。

なんだろう？ 木でできたサボテンのようだね。どんな使い方をしたのかな。



漁撈(淡水)

ほて

解説

川で捕ってきた魚を竹串(たけぐし)に刺し、イロリやカマドであぶり乾燥させます。適当な頃合をみて串ごと「ほて」に刺し、イロリの上や、軒端(のきばた)、天井裏などに吊(つる)して保存します。写真のほては竹製ですが、他に、麦藁(むぎわら)や稲藁(いなわら)でできたものもありました。

うつりかわり

現在の姿

近年は、流域の開発や汚染(おせん)などで川魚も減り、また、日常頻繁(ひんぱん)に海水魚を口にするようになると、川魚を捕って食べる人は少なくなりました。さらに、冷蔵庫の普及などもあって、ほてが吊してあるのを見ることはなくなりました。

魚を串に刺して乾かす用具



使われた年代 ～1950年代まで

使用した人々 漁師の人々



とくちょう

串にさしてほした川魚を串ごと突きさして吊すものです。

むかしまね資料館

なんだろう？

製鉄に必要な材料をこれに入れて運んでいたんだよ。



たたら

こがねおいこ

解 説

たたら製鉄に使用される砂鉄の箱形をした運搬用具です。砂鉄の質の良し悪しが作り出される鉄鋼のできを左右しました。「粉鉄7里に炭3里」という言葉が示すように良質の砂鉄を求め、運搬距離の遠近をいとわなかったことが知られます。砂鉄は中国山地の花崗岩の風化土である真砂土中から採取されます。砂鉄採取場から馬が通る比較的広い路までは専らこの用具が活躍しました。砂鉄の運搬重量は約50キロです。

うつりかわり

現在の姿

手押車を利用するようになりました。

カンナ場からタタラ場まで砂鉄を背負って運ぶ道具



使われた年代：昭和8年～同20年まで

使用した人々：たたらに従事する人 女性の仕事



とくちょう

砂鉄を運ぶ運搬用具です。

なんだろう？

炭を運んでいたんだよ。どんな場所で使っていたのかな。



たたら

すみとり

解説

すみとりは、たたら操業時、たたら炭を入れるための大型の箕（み）です。燃え盛る炉にたたら炭を入れるのは、2人の炭焚きの役割です。1回の操業（約70時間）にたたら炭は約13トンが使われます。30分ごとに2人の炭焚きがそれぞれ1杯10～15キロを、3杯ずつ、計6杯を入れます。

うつりかわり

現在の姿

たたら操業用具は現在も使用しています。

タタラ製鉄操業時、炉に炭を導入する竹製の箕



使われた年代：江戸時代～現在まで

使用した人々：たたら場で炭焚きと称される人



とくちょう

たたら製鉄操業時に炉にたたら炭を装入する竹製の箕です。

むかししまね資料館

なんだろう？

あるものを運ぶときに使っていたんだけど、そのあるものってなんだろう。



たたら

川こがね取りすき

解 説

川砂鉄を取るためのすきです。斐伊川の中流域で主に使用されていました。川砂鉄のありそうな場所を、ジョレンで砂を川下にかき、瀬を作り、流れによって砂が流され、黒い砂鉄の層が出来ます。この層に川下よりこのすきを入れ、砂鉄と砂をすきの上で水の流れを利用して選別します。すきに残った砂鉄は、近くに止めた舟にうつし、溜まると川岸へ運び集積します。

うつりかわり

現在の姿

1980年ごろから川底が低下するので川砂鉄を取ることが禁止され姿を消しました。

川砂に混ざっている砂鉄を取る道具



使われた年代 1980年頃まで

使用した人々 川砂鉄を取る人々



とくちょう

川こがねを取る道具です。

なんだろう？

下がこげているけど、火を使う場所で使っていたのかな。



たたら

すわりえぶり

解説

ケラ出しあるいはカマ出しは、動物でいう出産にあたります。操業開始から約70時間、たたら製鉄の成果物であるケラ（約2.5トンの鉄鋼塊）は、炉の解体によって灼熱（しゃくねつ）の姿を現します。ケラの上にまだ燃えきらないたたら炭が残っている場合など、柄（え）ぶりで炭をかき集めたりします。民具としてのエブリは農耕、製塩作業用が知られますが、それらと比較すると、柄が4メートル近い長さであるのは大きな特徴で、これは高温対策の結果です。

うつりかわり

現在の姿

たたら操業用具は現在も使用しています。

むかししまね資料館

ケラ出しのとき、ケラ上に残っている炭を集める用具



使われた年代　江戸時代～現在まで

使用した人々　たたら製鉄にたずさわった人

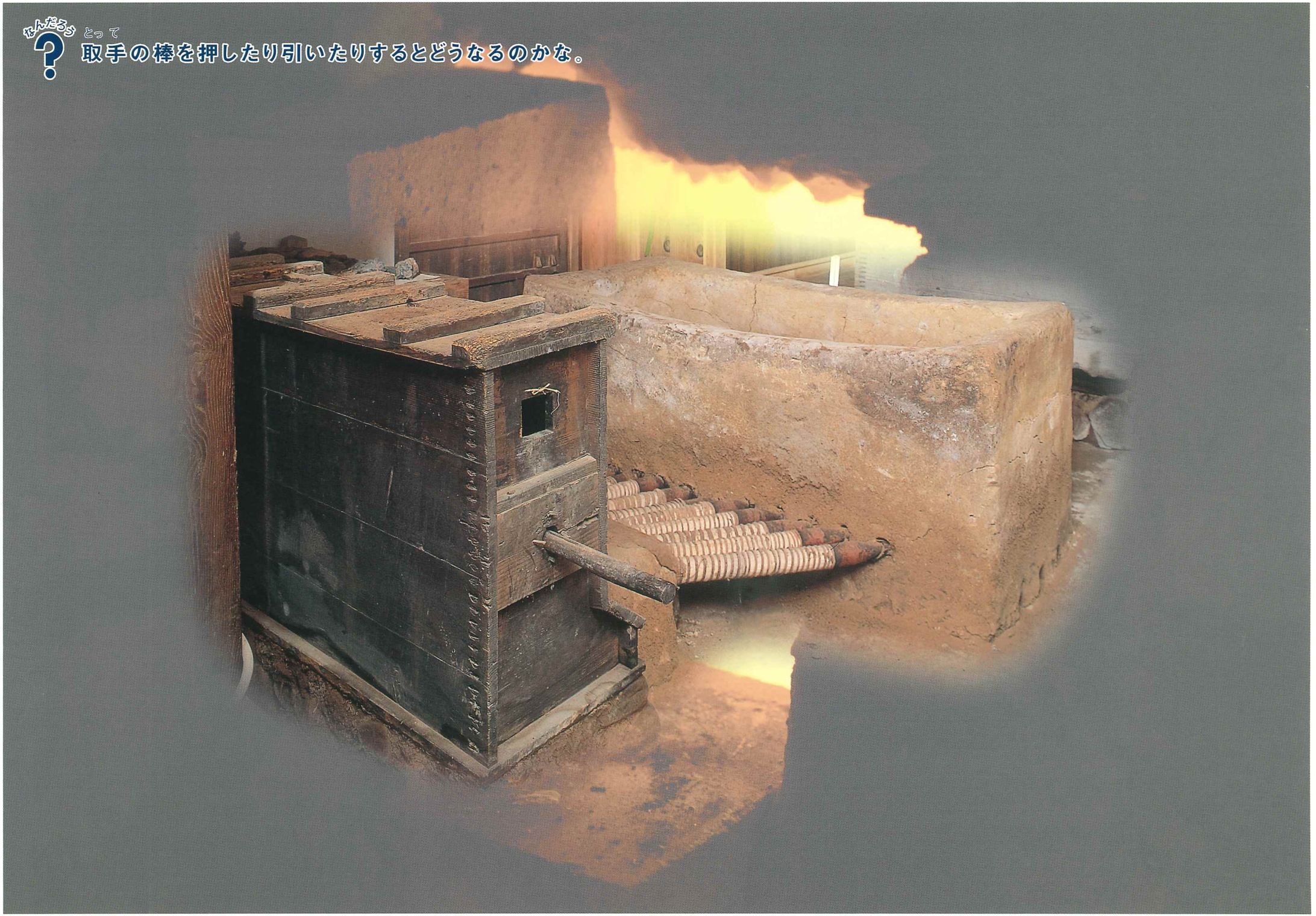


とくちょう

ケラ出しの際、ケラ上の残存するたたら炭のかき集めなどに使用します。

なんだろう？ とって

取手の棒を押したり引いたりするとどうなるのかな。



浜田市金城民俗資料館など

たたら

二丁鞴（にちょうふいご）たたら

解説

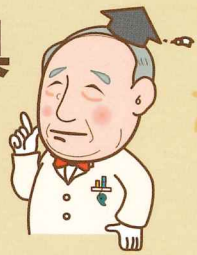
たたらは、「野たたら」から「吹子（ふきこ）たたら」、そしてこの「二丁鞴たたら」へと進化していきました。たたらの炉の両側に「ふいご」を備えることから「二丁鞴たたら」と呼ばれます。一台の「ふいご」から八本の気呂（きろ）で炉に風を送る「四丁鞴たたら」もありました。

うつりかわり

現在の姿

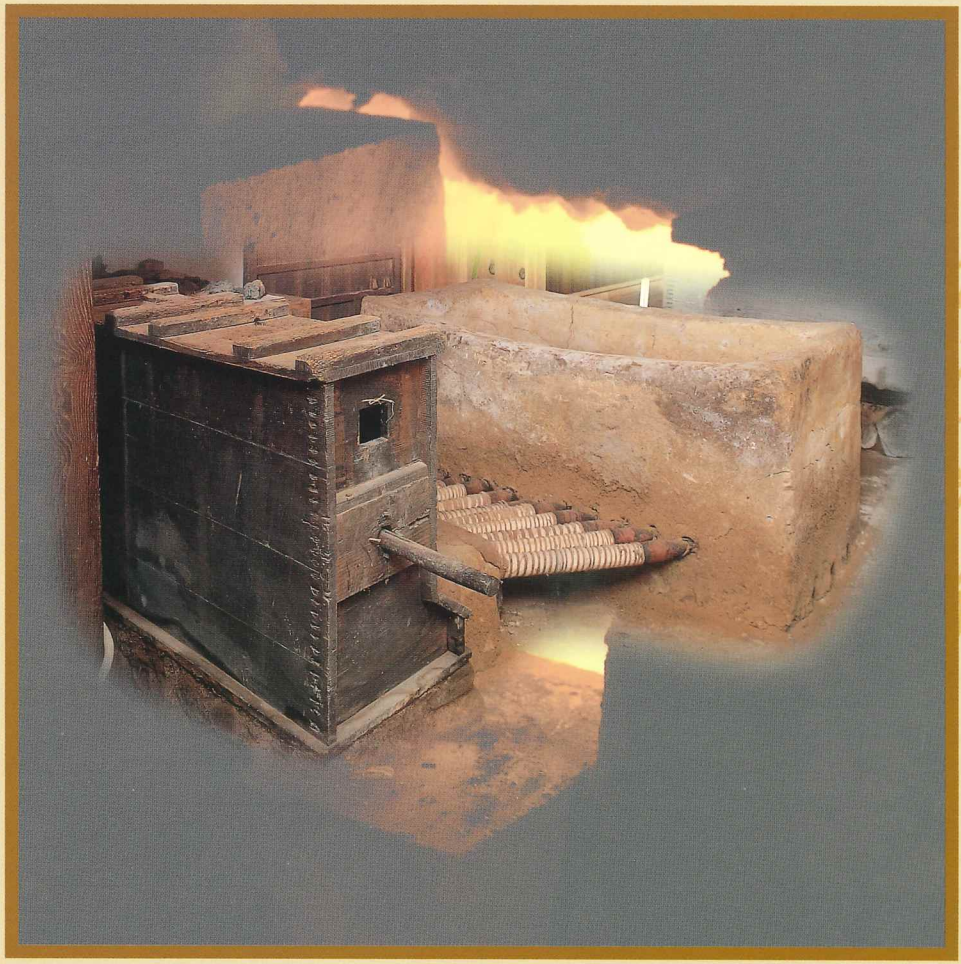
この「鞴たたら」から改良発展した「天秤鞴たたら」でしたが、明治末には「たたら製鉄」自体が消滅しました。

たたらの炉へ風を送る道具



使われた年代：江戸末期頃まで

使用した人々：たたら操業をする人々

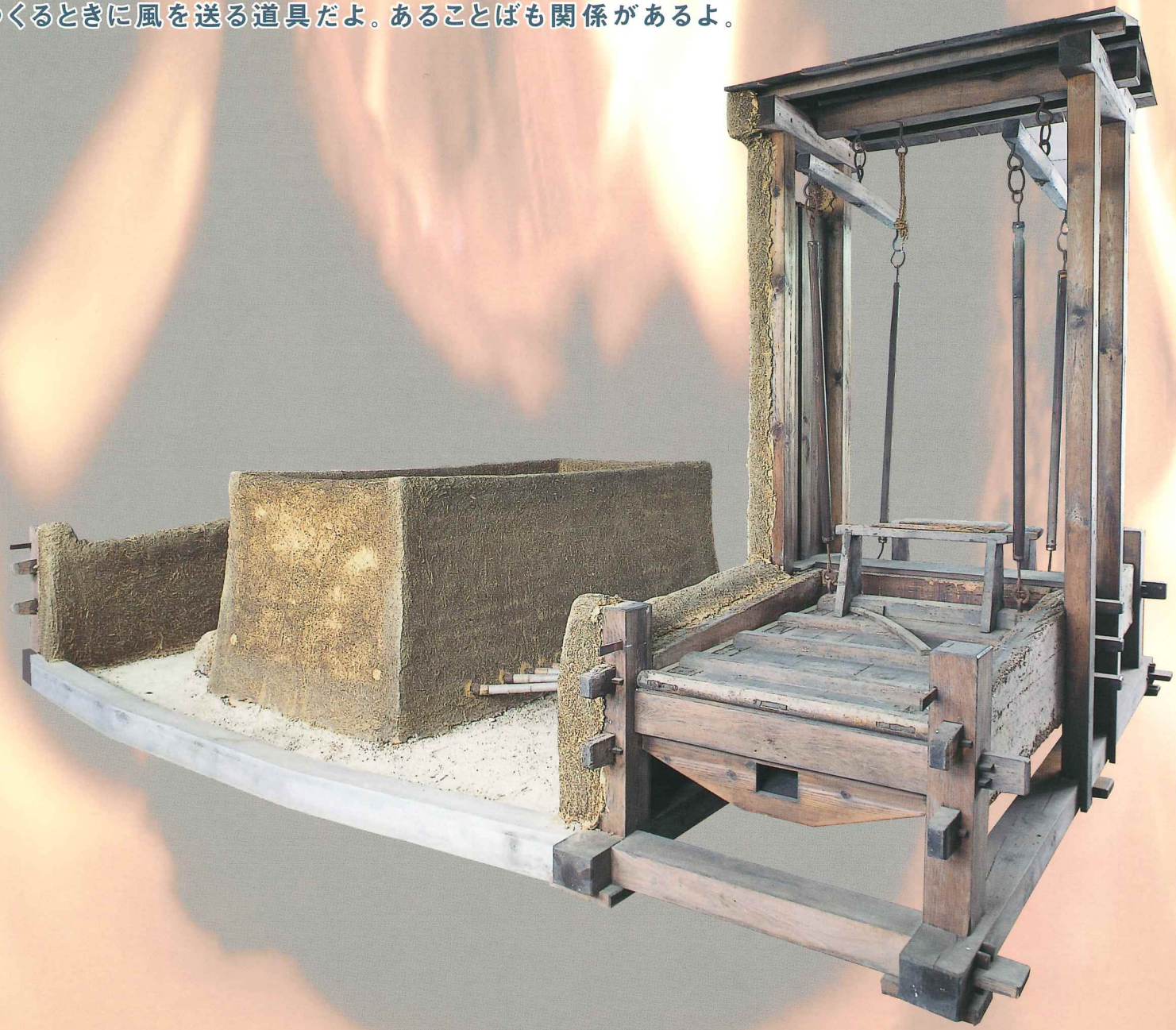


とくちょう

たたら製鉄の用具で、たたらの炉に風を送り込みます。

なんだろう？

鉄をつくるときに風を送る道具（どうぐ）だよ。あることばも関係（かんけい）があるよ。



たたら

邑南町郷土館

天秤ふいご（てんびん）

解説

中国山地で「たたら吹き製鉄（せいてつ）」が盛んだった江戸時代後期に使用された、製鉄炉（せいてつろ）内に風を送る「天秤ふいご」と呼ばれる道具です。たたら吹き製鉄は、三昼夜（さんちゅうや）、または四昼夜不眠不休（ふみんふきゅう）で操業（そうぎょう）する大変きつい仕事でした。「番子（ばんこ）」とよばれる職人が天秤ふいごに上がり、一人ないしは二人で交替（こうたい）しながらふいごを踏みました。交替することを「代わりばんこ」といいますが、その語源（ごげん）は天秤ふいごの番子さんから来ていると言われています。

うつりかわり

現在の姿

たたら製鉄は砂鉄（さてつ）と木炭（もくたん）を原料とする日本で発明された製鉄法です。日本で製鉄が始まった時代は、発掘調査などにより古墳時代後期（約1400～1500年前）までさかのぼることができます。この長い製鉄の歴史の中で改良（かいりょう）を重（かさ）ね、17世紀後半に「天秤ふいご」が発明され、鉄の生産量は飛躍的（ひやくてき）に増えましたが、明治以降西洋の製鉄方法が導入（どうにゅう）され、たたら吹き製鉄も衰退（すいたい）していきました。

たたら吹き製鉄に使用する送風装置



使われた年代：江戸時代後期まで

使用した人々：製鉄技術者

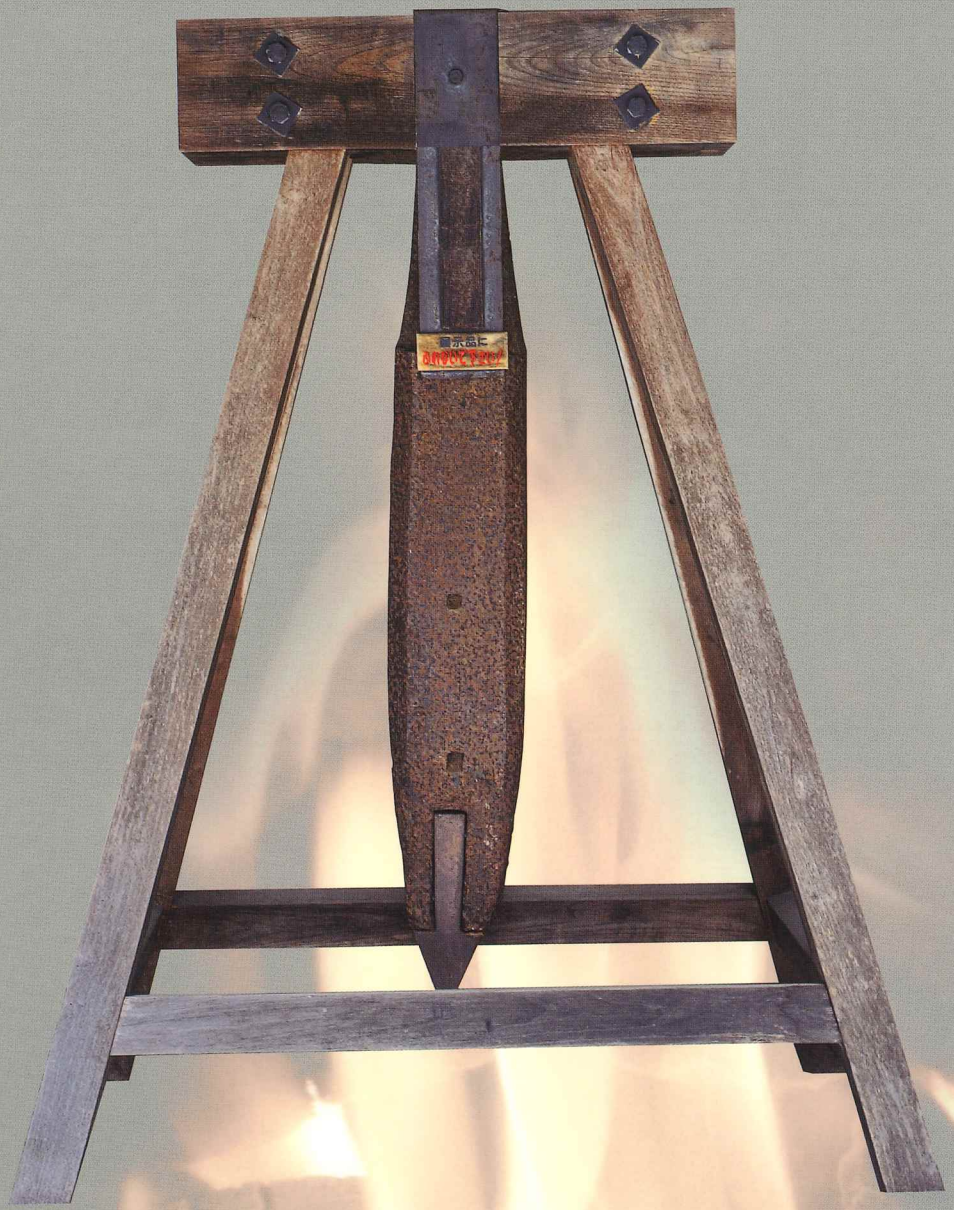


とくちょう

製鉄に使用した道具で、この上に人が上がりシーソーのように左右に踏み込みました。

なんだろう？

重さが500kg以上あり、先端はとがっているよ！



たたら

財団法人絲原記念館

大鋼（おおどう）

解説

たたら操業（そうぎょう）でできた鉧（けら）とよばれる畳一畳大の鉄塊を小さく割る道具です。全長約136cm・重量約650kgあります。大鋼場とよばれる工場の角塔の上に、江戸時代は人力で、明治時代以降は水力で引き上げ、下部に置いた鉧の上に落下させてこれを破砕（はさい）し、次の工程に送りました。先端部は、鈍化（どんか）するので、取り替えて使用しました。これが考え出される以前は、鉧を割る方法がなく、鉧は放置されたままでしたが、これを使うことで鉧中の良質な鋼（はがね）を取り出すことができるようになり、たたら師の利益は増大しました。

うつりかわり

現在の姿

奥出雲の製鉄師絲原（いとはら）家の工場で明治時代に使用されていたもので、現在は絲原記念館に展示されています。大鋼の他に、鉄塊をもっと小さく砕く中鋼・小鋼もありました。

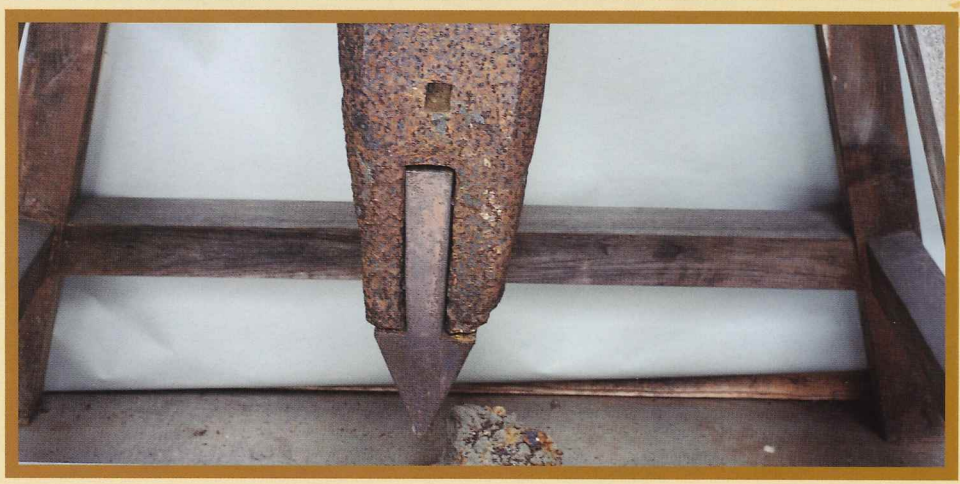
たたら製鉄で出来た鉄塊を割る道具



使われた年代：1770～1910（江戸時代中期～大正時代まで）

使用した人々：たたら製鉄工場





とくちょう

重量のある鉄刃状のものを引き上げ、落下させて使用します。

なんだろう？

熱を加えて中のものを蒸したんだよ。どんな使い方をしたのかな。



浜田市金城民俗資料館・日原町歴史民俗資料館・邑南町郷土館など

和紙

楮こしき

解説

紙漉きの原料の楮の皮を剥ぎやすくすらために、この「こしき」の中に楮を立てて蒸す道具です。昔は、紙漉きをする金城町周辺の全農家がこの「こしき」を持っていました。

うつりかわり

現在の姿

この「楮こしき」は縦型ですが、改良された物に、横型のセイロ式の大型の蒸し器があります。

楮を蒸す道具



使われた年代 大正末期まで

使用した人々 農家の人々





とくちょう

楮を蒸すための桶です。楮を立てて入れるために巨大な作りになっています。

なんだろう？

中に水を張って使ったんだよ。冬の寒さはつらそうだね。



浜田市金城民俗資料館など

和紙

紙漉き船

解説

この船に楮の紙料を水に溶かし、つなぎ材としてのトロロアオイを入れて、混ぜ棒でよく混ぜたのち、漉簀で紙を汲みます。昔は、漉くことを紙を汲むといっていました。江戸時代は、金城町周辺の全農家が紙年貢として紙漉きを行なっていたので、紙漉き船も一家に一個を所有していました。紙漉をするときには、船の前側に正座をして行ないました。

うつりかわり

現在の姿

紙漉き船（一枚漉き用）から四枚漉き用に、そして八枚漉き用にと大型化されましたが、現在紙漉きを行っている形態と同じ四枚漉き用の漉き船、あるいは、漉き槽が使用されています。

紙漉き船



使われた年代：明治20年代まで

使用した人々：紙漉き農家の人々



とくちょう

一枚漉き用の紙漉き船。この船に水を張り、紙料とトロロアオイを入れて攪拌します。

なんだろう？

スダレに木枠（きわく）が付いているね。作業の仕上げの時に使ったんだ。何だろう。



浜田市金城民俗資料館・邑南町郷土館など

和紙

漉簀（すきず）

解説

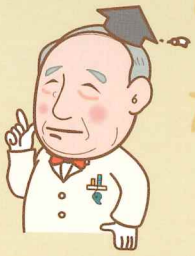
紙漉きのできを左右するのが、この漉簀です。古くは、一枚漉き用の漉簀は、茅の芯（かやしん）をヒゴの代用（だいよう）にしていました。写真の漉簀は、茅のヒゴを馬の毛で編（あ）んで作られています。四枚漉き、八枚漉きは、竹ヒゴを絹糸（きぬいと）で編んだものへと改良されていきます。紙を漉くときには、漉簀を漉枠に挟（はさ）んで紙を漉きます。

うつりかわり

現在の姿

漉簀は、古くは茅の芯をヒゴとした一枚漉き用の簀でしたが、明治20年代には四国の土佐から竹ヒゴを材料とした技術が入り、四枚漉きの簀が使用されます。大正時代になると、八枚漉きの簀へと代わっていきます。

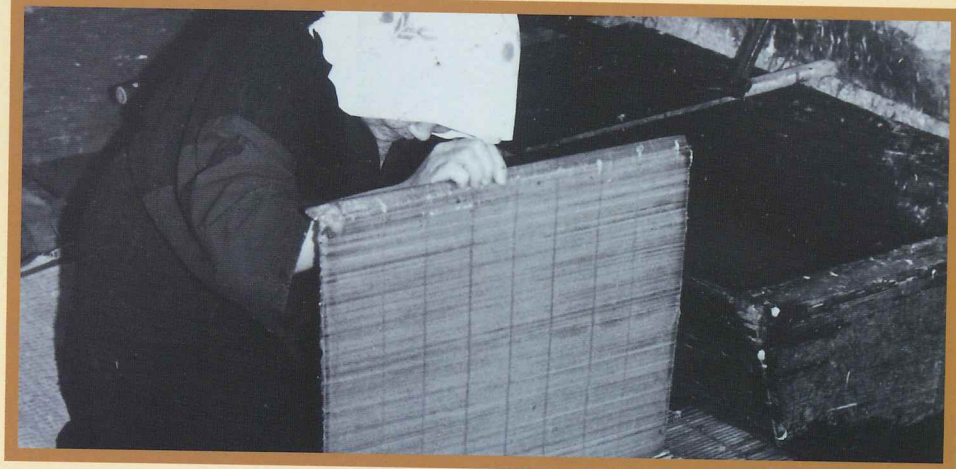
紙を汲む（漉く）用具



使われた年代：明治20年代まで

使用した人々：紙漉き農家の人々





とくちょう

一枚漉き用の漉簀で、茅の芯をヒゴの代用としたりしています。

むかししまね資料館

なんだろう？

手を入れて温めるためのものだけど、どんなときに使ったのかな。



日原町歴史民俗資料館など

和紙

手風呂（てぶろ）

解説

紙漉（すき）きは、質の良い紙を作るため寒中の一番寒い時期に行なわれます。冷水（れいすい）に溶かした楮（こうぞ）の繊維（せんい）を、簀（す）ですくい上げて振りさばく作業なので、手先は常に冷水で冷やされ、難渋した。てぶろは、この紙漉のとき、冷えた手を温めるために欠かせない道具です。てぶろは、楕円形の木桶の中に鉄の筒釜があり、この釜に炭火をいれて中の水を温め、湯温を保ちます。紙漉作業中、手が冷えると、時々この手風呂に浸けて温め、速やかな回復を待って続行されました。

うつりかわり

現在の姿

てぶろの使用は、この紙漉の歴史と重り、徳川時代に始まって昭和の始めに終ります。

紙漉きの時に手を温める用具



使われた年代：徳川時代から1920年代まで

使用した人々：紙漉き農家の人々



とくちょう

紙漉き作業の時、手を温める道具です。

なんだろう？ 普通の鎌とはだいぶ形が違うね。柄が短く刃が長いね。どう使うのかな。



浜田市金城民俗資料館・日原町歴史民俗資料館・
邑南町郷土館・絲原記念館など

紙切り鎌（かみきりがま）

解説

紙漉（すき）きの大きさは、一枚漉き、四枚漉き、八枚漉きの種類があり、それぞれの大きさに漉いた和紙を半紙判という一定の大きさに裁断します。裁断するときには、仕立台の上に甲石という定規板をあてて、この紙切り鎌で裁断します。

うつりかわり

現在の姿

印刷会社で使われている、大型の紙裁断機です。

むかししまね資料館

紙を裁断する鎌



使われた年代：大正末期まで

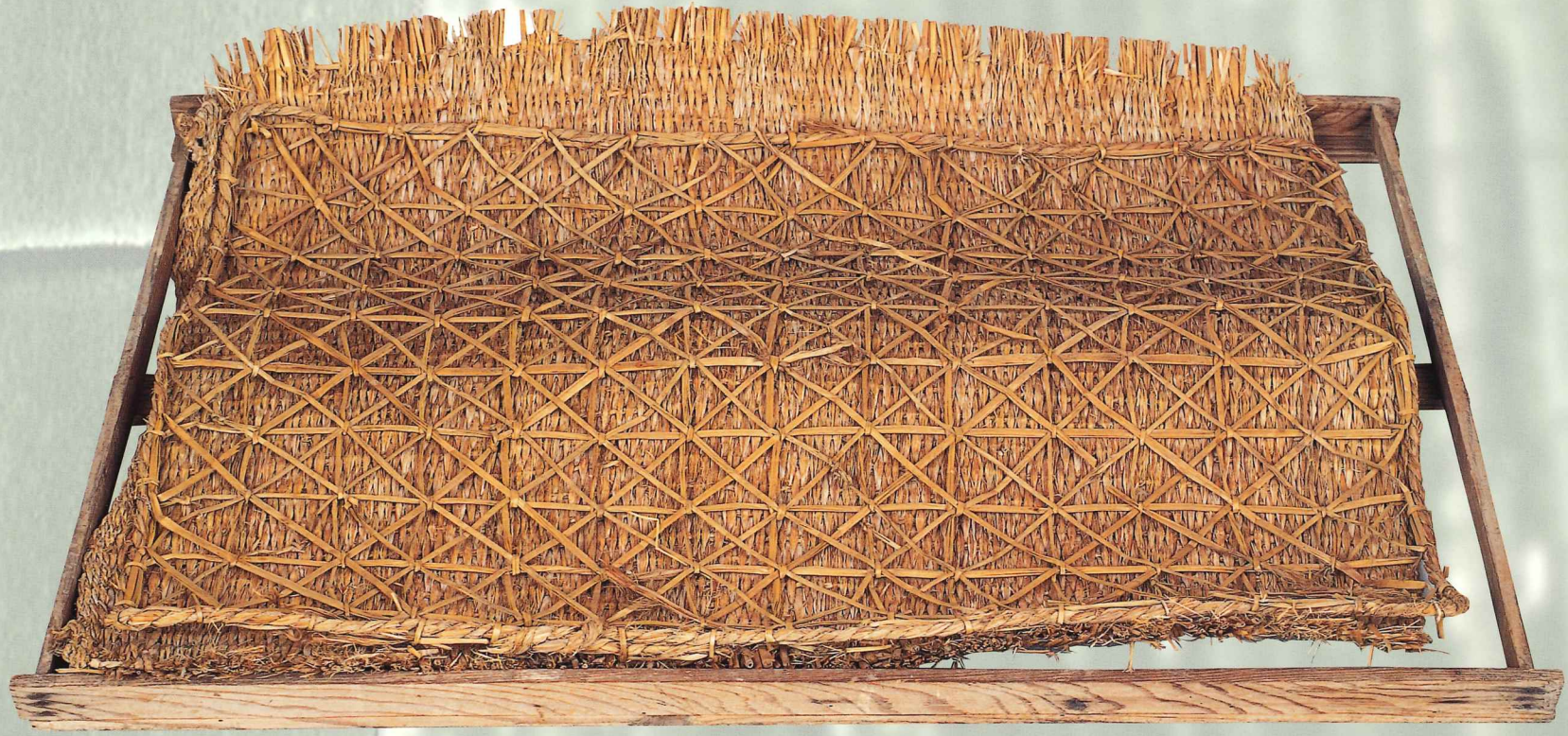
使用した人々：紙漉き農家の人々



とくちょう

紙漉き和紙を半紙判に裁断する時に使用する用具です。

なんだろう？ ある虫のお家なんだよ。なんていう虫かな。



養蚕

日原町歴史民俗資料館・飯南町民俗資料館・
邑南町郷土館など

蚕座（さんざ）

解説

蚕座は、竹や木で作った養蚕（ようさん）用具で、構造はいたって簡単です。蚕は、この蚕座に敷かれたコモの上で飼育（しいく）され、桑の葉を食べて成長します。やがて成熟（せいじゅく）したアガリコとなり、蚕座にのせられたマブシの中で繭（まゆ）を作ります。蚕座は、家の中の土間や部屋の中に、幾段にも吊られた蚕棚（かいこだな）に並べて使われました。

うつりかわり

現在の姿

蚕座は、四角の木枠へ割竹を2、3本打ちつけた簡単な構造で、時代による変化はありません。昭和30年代から土中飼育やムシロ上でのひらがい平飼が普及し、また上族（じょうぞく）には、回転マブシが使用されるようになって、蚕座は使われなくなりました。

蚕（かいこ）を飼うための台

使われた年代：1950年代まで

使用した人々：養蚕農家





とくちょう

養蚕道具で、この上で飼育やマユ作りをします。

なんだろう？

白い虫がエサを食べるところだよ。



日原町歴史民俗資料館など

養蚕

給桑台（きゅうそうだい）

解説

きゅうそうだいは、木製のX形に開閉する台で、棚飼（たなか）いのとき、棚から抜いた蚕座（かいこざ）をこの上に置き、こした（喰い残した桑の葉や蚕糞など）の取り替えや給桑をします。その他、上簇蚕（じょうそうかいこ）をまぶしへ振り込むときなどに使われました。台の高さは、飼う人の腰くらいに作られていて、飼育時の背伸びや屈（かが）みの作業負担を軽くしました。

うつりかわり

現在の姿

きゅうそうだいは、蚕座による棚飼いのときの道具で、昭和30年代に入り、飼育方法が棚飼から平飼や土中育に変わると、ほとんど使われなくなりました。

蚕に桑を与える蚕座の台



使われた年代：1950年代まで

使用した人々：養蚕農家の人



とくちょう

蚕座飼いの蚕に桑をやる時使う道具です。

なんだろう？ 台の上にあるお鍋のようなところに白いものを入れて使っていたよ。何を入れていたのかな。



日原町歴史民俗資料館など

養蚕

だるま

解説

だるまは、繭からの製糸が機械化される過程での最初のもので、その操作はまだ足踏式です。椅子に腰を掛け、足元の横木を両足で交互に踏むと、その動きは芯木を伝って先端のクランク金具に伝わり、さらにロット棒で上部の弾み車に伝えられ、これを回します。また、この弾み車の上に乗る小車の芯木には糸巻枠が仕組まれ、この回転により生糸が巻き取られます。煮沸された繭は台上の湯水をはった鉄鍋に入れられ、ここから引き出した糸口を、上部の糸巻枠に誘導する仕組みになっています。

うつりかわり

現在の姿

最初は煮た繭から糸を出し、指や糸車で撚って仕上げる手紡ぎで、次に座ったまま操作するざぐり（座繰）という道具になり、続いてだるまの普及となります。日原村には、明治27年、業者1戸、座ぐり製糸機のダルマ7台。明治38年、業者5、ダルマ18と云う記録が残っています。

繭から糸を取り出す道具



使われた年代：1925年頃まで

使用した人々：製糸業者



とくちょう

マユから生糸をとる旧式の機械です。

なんだろう？ 長いベビーサークルのようだね。



商い

平田本陣記念館・
財団法人絲原記念館・松江郷土館など

結界（帳場格子）

解説

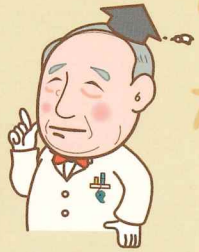
江戸時代、今の銀行に近い役割をする仕事は、両替座や札座でした。松江藩ではこの仕事は藩の許可が必要で、藩は藩内の有力なたたら製鉄師に優先的にこの許可を与えました。絲原家もその一つで、これは同家の札座で使われたものです。計算したり帳簿をつけたりする場所を帳場といいますが、その中心にこの囲いを置き、主人や番頭がその中で机に向かって仕事をしました。結界とは、もともと仏教で使われる聖俗を区別する境をあらわす言葉で、今日でいうバリヤー（barrier）のことです。

うつりかわり

現在の姿

仁多郡内五札座の一つであった絲原家の記念館内に、結界の他に帳場机・帳場箪笥・木製金庫・天秤・算盤・江戸時代の貨幣・落札などとともに、帳場の様子が立体展示してあります。

お金を扱う事務所で、他と区別するために用いた木製の囲い



使われた年代　江戸時代末（1800）年頃

使用した人々　絲原家の帳場





とくちょう

昔の銀行で使用されていました。

なんだろう？ 左右のお皿を真ん中で吊っているね。つり合いが肝心（かんじん）なんだけど、何に使っていたのかな。



浜田市金城民俗資料館・松江郷土館・絲原記念館など

商い

天秤（てんびん）

解説

両替（りょうがえ）のときに使用する天秤のはかりです。棹（さお）の中央が支点（してん）となり、両端に皿があり、片方の皿に分銅（ふんどう）を載（の）せ、片方の皿にはかろうとする物を載せて、棹が水平（すいへい）になったときの分銅の重さから、その質量（しつりょう）を測（はか）る道具です。分銅の水平を調節（ちょうせつ）する道具として、小槌（こづち）や才槌（さいづち）があり叩いて調整しました。これらの小道具は引き出し（おさ）に納められています。

うつりかわり

現在の姿

昔は、この「天秤」で両替をしていましたが、紙幣（しへい）の登場により使用されなくなりました。

金・銀・銅貨の両替時に使用する天秤の秤



使われた年代：明治10年代まで

使用した人々：たたら経営者



とくちょう

金・銀・銅の秤量（ひょうりょう）貨幣の両替時に使用する天秤の秤（はかり）です。

なんだろう？

大きな金づちだけど、普通は片手で使うんだよ。何をする時に使ったのかな。





来待ストーンなど

ゲンノウ

解説

ゲンノウは先端は鉄、柄(え)はカシの木を使用しています。来待石(きまちいし)を割る時にキリヌキマサヤリという道具で溝を掘り、矢(クサビ)を打ち込む矢穴を開けます。この矢穴に矢を入れ、ゲンノウを打ち込みます。この作業によって来待石を割ることができます。今で言うハンマーです。

うつりかわり

現在の姿

現在は石を割るのに電動工具を使用しています。現在はほとんどゲンノウは使用されていません。

来待石に矢(クサビ)を打ち込む時に使用するハンマー



使われた年代: 1955年頃まで

使用した人々: 採石をする人(山石屋)



とくちょう

石を割る時に使用する道具です。


なんだろう？
鉄製のクサビだけど、なんかズングリした感じだね。頭の部分をずいぶん打たれたようだね。



来待ストーンなど

ヤ

解説

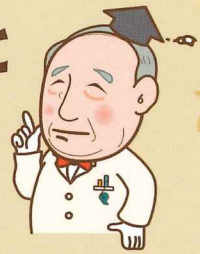
来待石（きまちいし）を割る時に、石の大きさに合わせてオオヤ、チュウヤ、コヤなどのヤを使用します。キリヌキマサヤリで石に溝（みぞ）を掘り矢穴を開け、そこにヤを据（す）えます。このヤをゲンノウで打ち込むことによって来待石を割ることができます。砂岩（さがん）系の石を割る時はこのような形のヤが多く、花崗岩（かこうがん）系の石英分（せきえいぶん）の多い固い石はやや丸みをもったヤを使用しています。

うつりかわり

現在の姿

現在はほとんど使用されていません。一部小割する時に使用される場合がありますが、ほとんどが電動工具に替わっています。

石を割る時に使う、クサビのこと



使われた年代：1955年頃まで

使用した人々：採石をする人（山石屋）



とくちょう

来待石を割る時に使用する道具です。

なんだろう？

長くて刃先がとがっているね。丈夫な木の柄をつけて使うんだよ。





来待ストーンなど

キリヌキマサヤリ

来待石を割る時にあらかじめ溝を掘り矢を打ち込むことによって石を割る。この時の溝を掘る道具



使われた年代：1955年頃まで

使用した人々：採石をする人（山石屋）

解説

キリヌキマサヤリは、来待石（きまちいし）を採石（さいせき）したり、割る時に使用する道具です。来待石に幅15cmくらいの溝を掘る時に使用する道具です。深く掘るにつれ先端部分をそり返させています。同じ角度の先端部分であると、深く掘ることが出来ません。



うつりかわり

現在の姿

現在はキリヌキマサヤリを使用していません。石を自動的に切るチェーンソーという機械に替わっています。

とくちょう

石に溝を掘る道具です。

なんだろう？

長く鋭い刃先のクワだね。どこで使ったんだろう。





出雲玉作資料館など

バチグワ、ツルハシ

解説

めのうは、花仙山（かせんざん）で穴を掘り採取しました。バチグワもツルハシも穴を掘る道具です。いきなり横穴を掘る場合もありますが、竪穴（たてあな）を掘り、ついで横穴を掘ってめのうを追いかけます。バチグワもツルハシも、狭い穴の中で作業しやすいように柄が短く、柄と先の角度が通常よりもやや鈍角になっています。柄（え）の長さは約50cmです。

うつりかわり

現在の姿

現在は、ほとんど採掘されていないので、使われていません。

めのうの原石を掘り出す時に使う道具



使われた年代：1900年頃まで

使用した人々：めのう堀り



とくちょう

狭い穴の中でも使えるように柄が短くしてあります。


なんだろう？
普通の火ばちとは、すこし違うようだけどね！



出雲玉作資料館など

加温用炉（かおんようろ）

解説

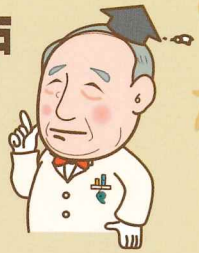
赤めのうは、低温で長時間温めると発色が良くなり、粘りが出て加工しやすくなります。この炉中には、灰または石灰が入れてあり、その中に赤めのうを埋めて、上に炭火を置きます。炉は、来待石（きまちいし）でできています。

うつりかわり

現在の姿

オーブントースターのような加熱器に材料を入れ、温度と時間を設定して焼きます。設定温度は、約120～300度、時間は10日～14日間です。

赤めのうの発色を良くするために加熱する炉



使われた年代：1900年頃まで

使用した人々：めのう細工職人



とくちょう

めのうの加熱に使用します。

なんだろう？

長い柄（え）の両側を一人ずつ持って使ったんだ。



石材業

出雲玉作資料館など

石引き鋸（いしひきのこ）

解説

山で採取した石を、必要な大きさに切断する道具です。下に長さ1m前後の長方形の浅い水箱があり、中には磨き砂（カーボランダム、かつては金剛砂（こんごうしゃ））を混ぜた水が入っています。この混ざった水を原石に注ぎながら鋸を前後に動かすと、少しずつ石が切れます。溝の深さが1cmくらいになると、あとは矢（タガネ）を入れて割ります。

うつりかわり

現在の姿

一度に4本～5本の鋸をモーターで動かして使います。石を切る原理は昔といっしょで、歯の部分に水に溶かした研磨剤（けんまざい）(カーボランダム)をかけます。

めのうの原石を適当な大きさに切る道具



使われた年代：1900年頃まで

使用した人々：めのう細工職人



とくちょう

効率よく石を切断できるように工夫しています。

なんだろう？ 左右の木の台にまたがっている鉄棒は、何だろう。



石材業

出雲玉作資料館など

剣ガネ

解説

勾玉などの形を作るのに使います。棒状の鉄でできており、断面は方形で、両端が尖っています。通常の長さは90cm前後ですが、この資料の長さは、約60cmです。剣ガネは、荒作りの段階で使います。一端を剣ガネ枕にのせ、他の一端をコギ板の上に、手で固定しためのうに押し付け少しずつ欠いて大まかな形を作っていきます。

うつりかわり

現在の姿

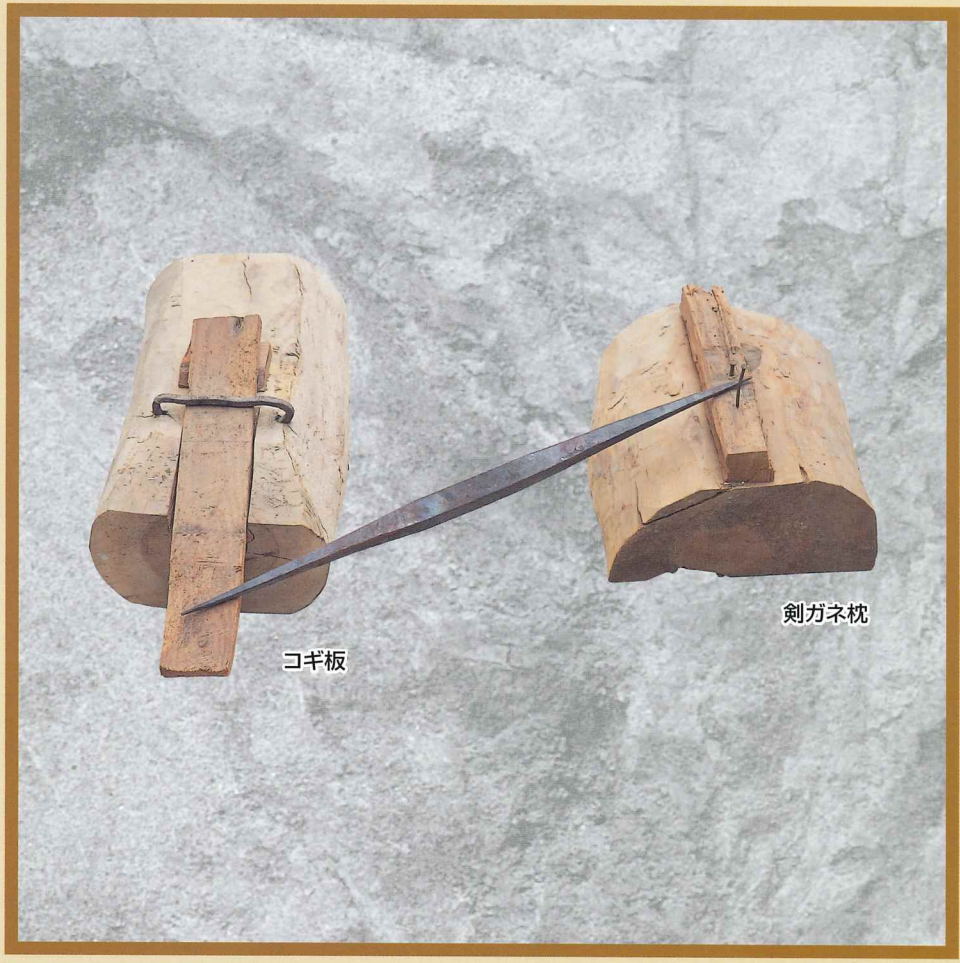
現在は、使いません。板状の材料を切って、大まかな形を作ります。

石製品の大まかな形を作る道具



使われた年代：1900年頃まで

使用した人々：めのう細工職人



とくちょう

てこの原理をうまく利用しています。

なんだろう？ 細長い板と丸棒。どちらも鉄製だよ。





出雲玉作資料館など

板ガネ、樋ガネ

解説

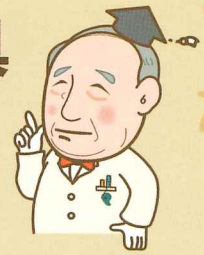
石材を荒磨(あらみが)きをする道具です。浅い桶の中に水と磨き砂（カーボランダム、かつては金剛砂(こんごうしゃ)）を入れ、鉄板上にその液をかけてめのうを磨きます。平面的なものは、板ガネ、断面が凸状のものは、樋ガネ、勾玉の内側は丸棒を使います。樋の板ガネは長さ30cm前後、幅12cm前後です。

うつりかわり

現在の姿

鉄板を回転させて、カーボランダムをかけながら研磨します。カーボランダムは、研磨の工程に合わせて数種類を使い分けます。磨く原理やカーボランダムの使い分けは昔と同じです。

めのうの原石を最初研ぐ道具



使われた年代 1900年頃まで

使用した人々 めのう細工職人



とくちょう

荒磨き用の道具です。


なんだろう？
すると
鋭い矢と小さい金づちがポイントだよ。



出雲玉作資料館など

穴アカシ矢と台

解説

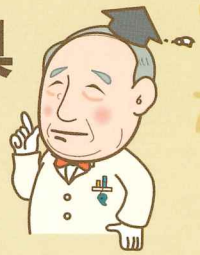
穴を開けるための道具です。台にはあらかじめ、玉を固定するための凹み（床）が刻んであります。石材を床に入れて固定し、先端がマイナスのドライバー状になった鋼鉄製穴アカシ矢を、穴を開けたい場所にあてがい、小さい金づちで少しずつ叩きます。穴アカシ矢の先には菜種油を接着剤として金剛砂をつけ、歯を少しずつ回転させて、打つ位置を変えていきます。台の直径は、30cm前後、穴アカシ矢の長さは、5cm前後です。

うつりかわり

現在の姿

現在は、ノズルから超音波を発射し、カーボランダムを躍らせて穴を開けます。穴アカシ矢に比べると、何倍も早く穴が開きます。

勾玉などの穴をあける道具



使われた年代：1900年頃まで

使用した人々：めのう細工職人



とくちょう

石に穴をあける道具です。

なんだろう？ 石のものと木のものがあるんだ！どちらも溝が付いているね。





出雲玉作資料館など

木砥と砥石

解説

両方ともに磨きの仕上げに使います。石材は、荒磨きののちに砥石にかけます。砥石は粘板岩質のもので、荒いものから細かいものまで3種類あります。荒い砥石から順に使用し、最後に桐製の木砥にベンガラを用いて美しい光沢を得ることができます。両方の砥石の表面には、磨いた跡の筋ができています。

うつりかわり

現在の姿

砥石は使わず、木砥に光沢剤としてペンタグリーンを使います。木砥は、モーターにより回転させて使います。細かい研磨剤を入れた筒を回転させて仕上げをする場合もあります。

仕上げ用の砥石で、最後の仕上げは桐の木で磨く



使われた年代 1900年頃まで

使用した人々 めのう細工職人



とくちょう

石材や木材のきめの細かさをうまく使います。

なんだろう？

これを定規（じょうぎ）の代わりにして、石にしるしをつけていたんだよ。





石材業

来待ストーンなど

ムナイシガタ

解説

使われはじめたのは明治ぐらいから、家を建てる時に屋根に瓦を葺きました。そして棟部にのし瓦を葺き、その上に来待石製の棟石をのせます。この棟石を屋根の頂上部に設置することによって、家全体の木材のはめ込み部を締めると言われています。この棟石を作るときに先端の型としてこのムナイシガタを使いました。

うつりかわり

現在の姿

現在は棟石が全んど使われなくなったためムナイシガタは使用されていません。

棟石を作成する時の型



使われた年代 1955年頃まで

使用した人々 石を加工する人（石工）



とくちょう

石にしるしをつけるための型です。